昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可　昭和卅七年十一月一日発行卅七年十一月号　（毎月一回一日発行）　創刊大正十三年通巻四二六号

川柳雑誌

麻生路郎☆主宰

十一月号

No. 426

Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

本社十一月句会

—香林・若菜　追悼—

香林、若菜の訃に当夜の句会でささやかながら追悼の意を表したいので万障繰り合わせてご参会くださるよう特にお願いします。（路郎）

日時　十一月七日（水）午後六時

会場　自安寺（〔211〕一四七八番）
大阪市南区千日前電停東スグ北側

兼題
「冒険」（三句）中島生々庵選
「あと味」（三句）土井文蝶選
「はけぐち」（三句）若本多久志選
「ホステス」（三句）松江梅里選

席題二題（当日発表）
香林、若菜夫妻の追悼吟（三句）

柳話　香林と若菜　麻生路郎

呈賞　☆各題天位・☆各題天位から路郎選により不朽洞賞

会費　百円

幹事　紫香・いさむ・南宗・文秋・庸佑・八郎・与呂志・清人・水洞・すゝむ・蕉風子・柳宏子・舟遊・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円
同封（〆切十一月五日）

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地
川柳雑誌社句会部
電・大阪(691)六〇八一

—12月本社句会—
『兼題』
見切り
日めくり
失言
栄養

日本盛酒坊

灘の清酒
ニホンサカリ

和やかに　まず一杯

東京酒坊・八重洲口名店街
大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰

不朽洞句帖

麻生路郎

東上（九句）

京都から乗る女性なり和服なり
一人旅のびのびとして鉛筆を削る
一人旅あれも言うとく筈だった
車内案内わさび漬からはじまった
一人旅隣りの週刊誌をのぞき
瓦屋根続く　清の絵の如く
労働は神聖クレーン向きを変え
汽車あとすざりす　遊んでいる如く
流れる雲を　ねたむ山々

香林・若菜を悼む

浄土へつづく箸蔵山の雲迅く

川柳雑誌十一月号目次

不朽洞句帖……麻生路郎……（3）
餅と団子……長野文庫……（13）
名句と難句……麻生路郎……（4）
生かされて生き……川村好郎……（40）
風羅念仏……東野大八……（12）
燃焼の問題について……直原七面山……（20）
★現代柳人録……（41）　★川柳書架……（31）

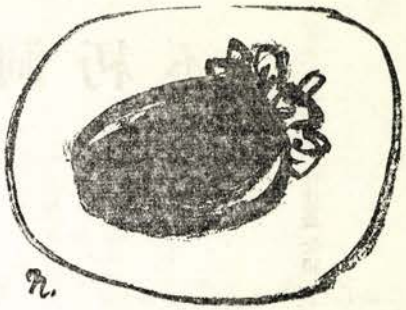
特集　私の本棚……古方・無鬼・すゝむ　春雄・半休・静馬……（25）
病気と川柳……北川春巣……（14）
大阪市民文化祭川柳大会……（32）

句評リレー……甲吉・遠二　文庫・晃……（30）

★大万川柳「息抜き」発表……（41）　不朽洞の人々　恒明氏の巻……（39）
電話と杖……―香林・若菜を悼う―……麻生路郎……（16）
香林・若菜句抄……清水白柳……（18）
ああ香林さん……早川清生……（18）
よみじ安らかに……不二田一三夫……（19）
愛別離の苦……冨士野鞍馬……（28）
薄雲……★

川柳塔……麻生路郎選……（6）
同舟近詠……諸家……（11）
近作柳樽……麻生路郎　北川春巣選……（20）
金泥集……麻生葭乃選……（19）
各地柳壇……（42）
★柳界展望……（38）　★不朽洞会から……（39）
入門講座……清水白柳……（34）
「皺」……市場没食子選……（36）
一路集　「外出」……長野文庫選……（36）
「失恋」……菊田いさむ選……（37）
★柳樽室……（46）　▼ペンの散歩……（46）

題字…麻生路郎・表紙…野尻弘



川柳 名句と難句

麻生路郎

〔三九七〕

いつからか男の方が子を抱いて

（雄　声）

近ごろ電車の中へ這入ってくる二十代、三十代、四十代の男を見ると、大てい幼いこどもを抱いている。

その後から、ハンドバッグを抱えた細君らしいのが乗って来る。

この光景は、近ごろでは珍らしくもなんでもなくなっているのだが、作者は「オヤッ」と思ったのである。

「ワシラの若い時分は、こどもは細君が、抱いたり、おんぶしたりするにきまっていた。別にそんな規則があった訳ではないが、それが、ならわしとなっていた。

それが、いつのまにか、ギャクになって男の方が、こどもを抱いたり、おんぶしたりしているのに奇異の感じをいだいたのである。たしかに、コレは一つの発見に違いない。あまり気を使わないでいても、世相というものは斯うして少しずつ、少しずつ変わって行くものである。

あまりハッキリしたことは言えないが、敗戦後、すべてのものがアメリカナイズしたので、自然に移り変わったと見るのが妥当ではないだろうか。

〔三九八〕

六三制音楽ばかり強くなり

（清　生）

過日、仙台の街路で、中学生の一群が、足並みを揃えて管楽器を吹奏しているのに出遇ったが、こんなことは仙台の中学に限らず、全国の学校でもおこなっているらしい。情操教育、音感教育がやかましくなったので、小学の児童が家庭でもピアノをたたき、バイオリンを学習するものが殖えた。

この句は六三制に通っている学童が、他の学課を放てきしているのではないかと皮肉っているのである。一寸面白い見方には違いない。音楽ばかりは内緒でやれないので、多少のオーバーでも他から見れば、音楽ばかりやっているように感じるのである。

六三制というのは学校制度の一つであって、小・中・高・大学の各修業年数を六・三・三・四に区分したもので二十世紀に米国に起った制度である。日本では一九四七年に実施した。はじめの六・三は義務教育であるから、音楽ばかり強くなるのはどうかなァと皮肉ったのも軽い穿ちとしてうけとれるのだ。

〔三九九〕

家康の例もあるからあせらない

（一　傘）

近ごろ家康論がやかましくなって、経営者も、勤務者も、徳川家康に就いて耽読研究をつづけているので、こんな句が生まれたのであろう。

家康は西暦一五四二年に生まれ、一六一六年に歿している。松平広忠の長子で、今川義元、織田信長を経て豊臣秀吉に属し、小田原の戦後、関東に入国、五大老の1、秀吉の死後秀頼の後見として政権を握った。関が原の戦後一六〇三年将軍となり、大阪陣で豊臣氏を滅し全国を統一し、徳川幕府一代の将軍となった。一六〇五年には隠居、大御所として駿府に住んだ。死してからは東照宮として祭られ、朝廷からは正一位東照大権現を贈られた。

家康は信長や秀吉よりも、辛抱強かったので最後の勝者となった。家康は少しも功をいそがなかったので位人臣をきわめたのだというので、財界人などの羨望の的となり、もって範とすべく研究となったのを、この句は「家康の例も」と言い、「あせらない」とも諷したのである。このネライはなかなか面白いと思う。

〔四〇〇〕

算術が悲しくなりぬ月給日

（甲　吉）

月給日にサラリーをもらった。月給袋の中には明細書が入れてある。そして差引きされたトータルは哀れにも、僅少の金額でしかなかった。オレの算術でも、一ト桁上の数字にはならなかった。オレの一カ月働らいた値うちが、これだけなのか。トータルの数字をジーッと凝視めていて、悲しくなったというのである。こうした感情を、「算術が悲しくなりぬ」と表現した手腕は凡手でない。

〔四〇一〕

〔四〇一〕
祖父が弓ひきし芝生にクラブ振る
（どんたく）

歳月はとうとうとして流れる。邸裏のこの芝生では曽て祖父が心身鍛練のために弓をひいていたものだが、自分はここでクラブを振っている。時代の移り変わりをまのあたり見てうたった感慨深いものがあるという懐旧的な情緒が巧みに詠まれている。

クラブは、ゴルフをなす際、球を打つ用具で、ホールの位置によって各種のものが使用されている。ゴルフはスコットランドで発達した球技、ボールをクラブで打ち、ホールに入れるまでの打数を争うものである。

〔四〇二〕
ホームバー下着一つの妻にする
（舟　遊）

人間の欲望には際限がない。営業用の媚に飽々した夫が、家庭に洋酒棚を造り、あらゆる洋酒をとり揃えてホームバーをつくったが、バーとしてのムードが出ない。そこで妻に下着一つになってサービスすることを要求し、妖しき雰囲気をかもし出そうとしたのであろう。よその変な女と戯れて、いつ帰って来るか判らない夫を待ちこがれるより、夫の意をうけて、下着一つでサービスする方がいいかもしれないと妻も要求に応じたのであろう。そうした情景がこの句となったのだ。

〔四〇三〕
人間ドックで次の社長を狙っている
（牧　人）

相当に産をなしたし、地位も出来たが、どことなくからだの調子が悪るい。何をするにも健康第一と気づく。そこで、少しでも悪いと思うところを癒しておこうと入院するのを人間ドックに這入ると言っている。よそ目にはゼイタクな入院だが、この句のように次の社長を狙っているとすればゼイタクでも何んでもないわけだ。人間ドック入りを次の社長を狙っていると観たネライは面白いと思う。

だいたい船渠は船舶修理用の施設であるが、人間ドックは人間の諸機関を精密に検査修理する目的で入院するので、斯うした名称で呼ばれるようになったのである。

〔四〇四〕
泣くことを遺族に任せ手を洗う
（弦太朗）

「ご臨終です」と医者は静かに宣言した。その言葉をきっかけに遺族の人たちは、堰が切れたようにワッと泣いた。しかし、医者はその方へは目もくれず静かに手を洗ったというのである。いかにも冷淡なようにうけとれるが、近親者の立場と、職業者の立場とがこんなにもハッキリと描かれた句は稀である。

〔四〇五〕
誰とでもねる子に育つ不倖
（旭　童）

まるで柳樽の中から抜け出たような古調な句だ。早く両親を喪った子であろう。そぞろに哀れを催させる句である。

「誰とでもねる子に」の措字がバカによく利いている。

〔四〇六〕
阿呆にも解るクイズを出す阿呆
（三　窓）

この句を、一読三読すると、思わずふき出さずにはいられない。

たしかに、そうした人を食ったクイズにブッ突かることがある。まことに変哲もない句のようだが、つかむだけはつかんでいるので面白いと思った。

〔四〇七〕
手袋を忘れて情事の部屋を出る
（夢　紅）

手袋を忘れたのは男か、女か、それはどちらだか判らないがどちらであってもいいだろう。若さか、よろめきのデートか、それも判らないが、情事をこんなに美しく表現しているところに、この句のいのちがある。

〔四〇八〕
つつもたせチャチな背広をはいだだけ
（望　峰）

その女にはヒモがついていた。

「オレの女を、どうして呉れるんだ」と、凄ごまれた。ぐれん隊らしい人相の悪るい若者だった。

会社員風の男は慄えあがった。

「つい、……その……」

「つい、どうしたというんだ」

「つい、酒が這入っていたものですから」

「なにッ、生意気なことほざくな。酒が這入ったら他人の女を奪ってもいいというのか」

若い男は二つ三つなぐりあげられたが、売約金以上の金を持たなかった。

「チエッ」と舌打ちをしたヒモは、うむを言わずに若い男の背広を剝いだのであった。

この句は僅々十七音字の中に、斯うした情景をまざまざと描がき出しているのである。

つつもたせ（奸婦・美人局）は夫と馴れあいで姦通し、姦夫から金銭をかたり取ることであるが、現在では俗にヒモ付と称する売春婦と情夫が、馴れあいで、この句にあるような範囲にまで、つつもたせの手段がひろげられている。

〔四〇九〕
利用価値があるのか挨拶状がきて
（水　客）

サラリーマンのオレに、知事や市長から挨拶状が来た。マンザラ悪るい気もしないが、選挙めあてならご免蒙りたいと、いうのであろう。

「利用価値があるのか」は皮肉を言っているのだ。面白いではないか。

結婚式場
長生殿
近代的な設備をととのえた
関西一の結婚式場　貸衣裳も
豊富にそろえております●6階
大阪日本橋
松坂屋
TEL 631-1171

川柳塔

豊中市　戸田古方

頭の体操やいうて数学させられる
スポーツの選手であったのが死んだ

西宮市　若本多久志

拝啓とうっかり書いて苦笑する
時速四十今日は女房を乗せており
嫁入りの道具にダットサンが売れ

大阪市　正本水客

故郷に買いかぶられたまま過ごし
送別という名で上座あけておく
呼びすてにする付合いをうらやまれ

高槻市　丸尾潮花

唇がとけはせぬかと思う恋

大阪市　北川春巣

大阪に一台という馬力行く

貿易九〇%自由化

父一人舶来舶来云うてはる

ワイマル　羽佐間柳葉

戦前の軍ならツイスト何んと視る
公平な分配にさえ慾がさし

堺市　吉田圭井堂

実印も預けた仲を裏切られ
若い妓等渋い声には寄って来ず
満月と一緒に浸る露天風呂
原文のままと成る程誤字だらけ

防府市　長野井蛙

役得に門限のない勝手口
子の笑う古い頭で悔がなし
ハイヒール田舎の土に親しめず

岡山県　直原七面山

爪染めた娘に狭ますぎる田舎町
来賓席で蛍の光歌わされ
ボス一人しゃべって相談会終る

五女生る

五人目も女で近所まであきれ

皇太子御夫妻を迎えて

心の旗ふって皇太子を迎え

豊中市　足立春雄

停年にさてこれからの若さあり

倉敷市　木村千容

絞ってももう出ぬチューブ振り向かず
白露曰く人間の瞳が生きかえる

倉敷市　田垣方大

おかしくもないのに笑う新課長
おみくじに歩き方まで変えさされ
女性なら気安う乗せる自家用車
本当に停年ですか顔の艶

加賀市　野村味平

いいとこへチャンス到来辞めて去に
雷鳴の恐い女が膝へ来る
お針ッ子かかえて女房はかながり
高校で酒もタバコも旨くなり

大阪市　後藤梅志

団子売りでさえも責任感あふれ
新薬の世話にならずにすむ散歩

米子市　小西雄々

栄養はビールでとると自慢する
映倫のカットがいたい野心作

共稼ぎ十二年目

大学へ子を出す夢で共稼ぎ

大阪市　山川阿茶

嫌になりなはれと洋服せがまれる
デブちゃんを心丈夫にしたわたし

大阪市　金井文秋

成り上りはったりにする本もいり

加賀市　那谷光郎

酒飲みの長所を女見てくれず
碁盤拭く或日の妻の愚痴を聞き

大阪市　福井野迷路

涼風に冷蔵庫のぞく癖がとれ
出嚊子も年期で無形文化財

下関市　桜川不水

妻の留守ひとり飲んでて暗くなり
三日目は鏡台を見る妻の留守
残飯が溜った頃に妻帰り

会者定離ただ秋風に立っていた

出雲市　尼　緑之助

ごきぶり亭主が台所のね酒
あいびきをびっくりさせてオートバイ

大阪市　水谷竹荘

入院をしたとベッドの上で書き
借金はそのままにして入院し

奈良県　飯降白香

蜘蛛がはうような手つきでピアノ弾き
活ける手がよっぽど花より魅力的

奈良県　西辻竹青

大吉と出て友達をまたさそい
ご機嫌の悪さは受話器にもこたえ

岡山県　福島鉄児

山の匂い都会の客に教えられ
扇風機止めて千円札を読み

岡山市　服部十九平

鳥籠に水を与えて試歩に出る
申訳のように胡瓜が一つなり
帝王切開した子が不孝者になり

旅客機の影葬列を切って過ぎ
お隣の柱時計で目をさまし

尼崎市　長谷川三司

湯上りの匂うムードも旅のもの
水中花病む枕辺の水を替え

西宮市　若林草右

水ききん墓場の水も並ばされ
ハイティンの悩みニキビとは羨やまし

高槻市　山田季貲

二重世帯他人の意見も聞いてみる

幹線鳥飼軌道工事へ着任

田を埋めてここ幹線の汽車通る
広びろと田ンぼの中の着任地

岡山県　田村藤波

死にたくば一人で死んだらよいものに
同窓のカンパで建てた恩師の碑
人知れず入歯を掃除する悲哀

岡山県　本田恵二朗

二枚舌オールのように漕ぎわける
身許不明で一応のせる夕刊紙

大ジョッキ威厳の髭に泡がつき
京都市　松川杜的

御見舞の嵩を心配する程に癒え
初老哀れ眼鏡を外す人かける人
堺市　高崎雄声

月旅行というのにまだまだ蚊帳がいる
もう齢だジグザク行進から外れ
島根県　藤井明朗

灯を消して蚊帳から通り眺めて居
駅長の趣味にホームは花ざかり
一室は洋間もほしい共稼ぎ
腕ぐみをした相談はまとまらず
岡山県　永松東岸

火葬場へ轢いた車が積んで行き
役人が押す豊作の太鼓判
紐つきの解雇は足を延して寝
夏草を枯らして焼いて秋となり
めくらばかりの世の中だとは思えぬに
病む父へ子等が手となり足となり
取り替える部品もなくて病みつづけ
無視してはいても目の上のこぶはこぶ
倉敷市　野田素身郎

科学的などと数字をもてあそび
寝物語りもせず共稼ぎ明日に寝る
今夜は眠れると思ったら消防車
大阪市　伊達堰子

パパがまだ丁稚の頃に泣いた橋
埋めたてて車を流す川となり
再会の名刺に労組委員長
ネグリジエにチャルメラだんだん遠くなり
大阪市　不二田一三夫

夜店ではやっぱり本屋学があり
名の売れるとこならどこでも顔を出し
抱き合った白骨屍体が妬たましく
兵庫県　酒井ひか平

まだ取れまへんかと試験官笑い
長男の不運高校門を閉じ
足組んで四十男をまごつかせ
ぜいたくなハンターだけが雪を待ち
芦屋市　丸川初甫

ベレー帽で肩のこらないお故郷入り
網の目をくぐって故郷の母に逢い
取消しの使い戻らずうどん来る
唐津市　新岡回天子

月見台我一人あるよう思いつつ
岡山県　池田古心

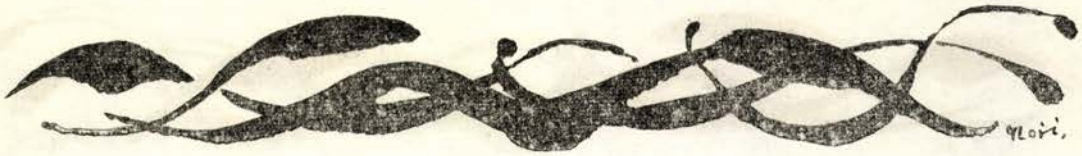
表彰へ足の震えを意識する
表彰は牛です飼主代理で出
大阪府　早川清生

海女饒舌焚火の炎力とし
店継いでから夕刊の八卦欄
後妻と出　食堂食べるもの合わず
帰郷して雪隠詰めのように死ぬ
大阪市　西田柳宏子

電話する声も明るい退社前
聞き難い電話怒鳴れば社長サン
受付を通る名刺は別に持ち
堺市　辻圭水

戸締りを忘れていましたむし暑さ
納骨を終れば再婚したい顔
無記名の投書は嘘も三分まぜ
大阪市　児島与呂志

抱いて乗せ子好きとわかる運転手



大阪市　橘高薫風子

不身持にさせたは美貌とは悲し
美しい貝殻に似た若き寡婦
ヒステリー案山子さんなと見ておいで

大阪市　西川　晃

教祖もう仮面で生きるほかはなし
御高説拝聴むねがむかむかし
ひと誹る眼をいきいきと輝やかせ
鄭重なことばで距離が遠くなり
児を叱る声軍曹の声になり

神戸市　仲　どんたく

恋人にあんまされてる老らくの
ふんどしで月見る人へ声をかけ
名月へ涙ぐむのも大正か

平田市　久家代仕男

居心地を賞めて寛ろぐ里の母
犬までがじろり冷たい主に似て
叱られる折から夕立小気味よし
真実へ地位の弱さは目をつむり
広大な庭もて余す草が伸び

大阪市　本多柳志

中元展示会大きすぎ小さすぎ
貸借対照表組合へも気をつかい
アタクシの夫ですのと引き合せ
車買うてからも定期券はもち

出雲市　原　独仙

つぶし値にして停年後雇われる
笛ふいて居るが踊ってやるものか

岡山市　光好陽子

プライドを傷つけられた日の無口
云うた云わぬと女同士の姦しい
二重人格芝居のような演技をし

大阪市　魚住満潮

続西成界わい

服も靴も借物今日はデイトなり
当り屋の足ジグザグでやって来る
うどん屋を出て寝るとこのない親子
自転車位泥棒と思ってず
金のこと云えばつんぼになる亭主
幼女暴行大学までも出てるのに
仮出獄五臓六腑を通る酒

愛媛県　村上旭童

残業は名月の道帰るなり
冷えてゆく土を大根感じたり
どちらかが死ぬまでという意地もあり
籠へいれてなかせてなんの秋の虫

神戸市　傍島静馬

ズボンより中のステテコ太いなり
嫂はしっかりしててもけなされる
デイトなら仕事どうでも都合つき
何んどきでもお供しますと飲む話

出雲市　野村岬月

アイデアを生かす資本が廻りかね
残酷をみんな集めて病みつづけ

布施市　森下愛論

特売であさった柄も派手になり

姫路市　植村客遊子

ガム噛んで可愛気のない事を云う
下駄チャンと揃えてくれて妻の母

大阪市　河井庸佑

若さには勝てぬものだと知りながら

大阪府　谷沢好祐

知らぬ間に決めといて寄附取りに来る

点数で人の序列を教師決め
終戦ッ子先ず進学の壁にあい

泉大津市　高津　徹也

公園の芝生ラテン音楽這い寄りぬ
何んでも一通りやりましたと粋な老

愛媛県　槇　紫光

よそ見したままで看護婦お大事に
凶器ともなる腰紐の赤い色
履歴書へまだ軍歴を書きたがり

青森市　工藤甲吉

来年の選挙の酒を飲まされる
赤トンボ飛ぶ頃母が恋しくて
秋の風女は腕を仕舞いかけ
ハンカチの中で女は泣いている
人間も尾の振り方を考える

松江市　小林孤呂二

復命書旅費あましたと書いてなし
音楽が2とはやっぱりアナタの児
うなぎ焼く匂い年寄たたえる日

豊中市　林　夢虹

日記帳己を飾る文字がある
星なき夜ユダの心になっていた
流れ星妻は少女を抜けきらず
素肌に触れる鈴虫の声
チョコレートのブラックこの娘は恋を知っている

大阪市　今西生薑

友達の借着で外泊(トマ)り夜の蝶
人並に子供は産まし無為徒食
親類へ創価学会せまって来

京都市　室井八九寸

本姓で呼ばれ横綱かしこまり
PTAママの張り切るボク不出来
幾度でも出るはず知事さん貯めてはる

岡山県　横山一声

橋の下の住いにも番犬がおり
反対を押し切った夫婦もう別れ
種物を売る声も秋の風にのり

小松市　関戸宗太郎

自動車学校パパは平気で落第し
定刻に来て大の字に寝転ろがり
しよもない雑誌歯医者で読みつくし
石仏みたいになって妻むくれ

石川県　高山涼髪

意外にも彼女が創価とはたまげ
二人目はまだかと小児科愛想よし
情熱家なのねと女給にあしらわれ
保険屋をしながら余生の夏をやせ

美称市　安平次弘道

特ダネへシャッターを押す手が堅い
冗談から出たアイデアも金にする
サボテンの生命(ちから)を病床でうらやみ

愛媛県　渡辺暁童

男親スパルタ式に袂別し

宇部市　平田実男

想い出がいっぱい本家の砂糖壺
古傷を婦人誌黙って嫁けと云う

大和郡山市　中内孚彦

奈良ボケで俗化論の槍玉にされ
戦後ッ子は小さな家庭が夢だとか
長男が養子にいく言うてにっと笑い

諫早市　川岡霊眼子

あざけりに耐えて肥って恙なし
月ほめて居るのも男暇なとき

敗戦で受けた恩給で老いて行き

貝塚市　杉本一鶴

生きている意義へ感謝の箸を持つ

男の中の男みるよな夏の雲

大阪市　本多清人

従弟の死

教養も知性も無駄に彼は死に

事件記者野次馬心理をもてあそび

富田林市　浅川八郎

来い来いと言うからほんまかと思い

老いの身の柳に風と耐えて生く

岸和田市　内藤きさ子

坂道のさよならあとも見ずに降り

病室の風をよろこぶ見舞客

家を売る話へ皆の地獄耳

青森県　木村涼人

路郎師を想う

訓された大阪弁の柔らか味

薫風子氏へ

初めての土地太刀持も気が疲れ

不朽洞入会

弥栄の松に新芽が一つ殖え

後へ引く勇気も出来て年不惑

お隣りの南瓜自由をはき違え

芒に詩あって清貧よしとする

倉吉市　奥谷弘朗

小役人まあまあ主義に成りすまし

同舟近詠

須坂市　高峰柳児

子が知っている誕生日にあわて

断水の沙汰合併の村あわて

それぞれにはね返り待つ花輪なり

和歌山市　秋月宏方

分譲地草作ってるわけでなし

働けとのぼる朝日に嘯かれ

下駄ばきもまたよしレジャー楽しむ日

どこからかこおろぎが来てないてくれ

今治市　長野文庫

母の日が素早く見つけた足の裏

冗談を云いながら食うふぐ料理

言葉では結婚やはりやる貰う

思案して居る内一段地価上り

日稼ぎに天下太平気に入らず

かくし芸割箸日本刀になり

大洲市　米沢暁明

バスガール今日は生憎見えません

大鵬の故郷とガイド附け加え

ここからは見えない景もバスガール

君の名が美幌峠でよみがえり

記者の勘外出先きへやって来る

松山市　月原宵明

葉鶏頭軍人墓地に秋が来た

萩の道ひとり歩いて淋しがり

黄昏のバスでやとなの御出勤

寄附をするのに願書のいる役所

上田市　金子呑風

母親の一人息子へ懲がすぎ

甲子園以来母校へ続く寄附

名古屋市　長谷川鮮山

柔術の心得がある歩きよう

母も眼を少し外らしたキッスシーン

風羅念佛

東野大八

足立直郎という人が、ある雑誌に広瀬惟然のことを書いている。

惟然は尾州名古屋の人で、代々続いた豪商でありながら俳諧に凝り芭蕉の門に入って句作三昧、ついに芭蕉が晩年、故郷伊賀から難波への旅には、同僚の門下生支考とともに、師の下僕となって、その最後の旅をともにした。そのとき彼は家業はもとより妻子までも捨てていた。時に齢四十七。

支考は三十一歳の若さだけに、惟然は四つ齢上の、師の芭蕉とよくウマが合い、その深い洞察力もあって芭蕉は殊のほか、彼を愛し接していた。

長い旅路の末、難波に着いて催された句会の席上、ふいと芭蕉は、自作の句を懐紙に記して惟然に示した。惟然は句面を見つめたまま答えようともしないので、芭蕉が重ねて

「どうした惟然、泣いているのか」

とたずねると惟然はやがて身を固くして

「この秋は何で年よる雲に鳥」とありまするが雲に鳥とはもはや人間の作ではありませぬ。寂しいとかなんとかそのようなところではありませぬ。どういうものかあの「更科日記」の月の夜に、今この空を飛んで行ったらと申したあの女の心持ち……ちょうどあの心持ちのようになります。何かこう突き放されたような……」

と言って芭蕉の心境に一まつの恐怖をさえ感じた顔であった。さらに惟然はつけ加えた。

「これは他人のうかがわれない心であるように思われますが……」

すると芭蕉は静かに言った。

「人に解らぬような句は句ではない。うかがわれぬ心があるようなのは下作じゃ。しかし、わしはもう人に解らせようとか、上句を作ろうとか、そのような気がなくなった」

この句は芭蕉自身の人生における人生観、自然観であって、その「寂寥」を句の上に表わしたにすぎないのであるから、よし句意が惟然に正しく解せようと解せまいとそのときの芭蕉はさして問題ではなかったのである。

自己の内省の現われが、どういうふうに他人の眼にうつろうと、芭蕉にしてみれば、自由勝手でよかったのである。千歳の知己など芭蕉は強いて求めず、自分を他人に解らせようとはねっから考えもしなかった。芭蕉のそうした人生的な一つの哲学が寂寥をとおして今日なおつよくわれわれの感情にひびいてくるのである。

芭蕉の死後、惟然は完全に世捨て人となり、僧形もひどい乞食坊主となりはて、路傍でただひたすらに風羅念仏を唱えて歩いた。

ともかくも、ともかくも
ならでや雪の枯尾花
空也の瘠せも寒の内
塚もめぐるか鉢たたき
南無阿弥陀ァ　南無阿弥陀ァ
はやせ、はやせ風羅念仏はやせ

惟然は、この念仏を唱えて人境から離れなかった。俗を離れて俗に離れ切れない人間のこの一面は、独り枯野を行く芭蕉の寂しい旅人感とまったく対照的といえる。彼も人の子の父であり、夫であった。家財や妻子をすてて人間を離れて人間を見ようとして、逆に人間的には破滅を招くに至った生涯は、傷ましき永遠の旅人の一人ともいえよう。

足立氏のくわしい一文を要約すると以上の通りだが、ぼくはとりすました芭蕉より、惟然の人となりに胸打たれた。惟然はどこまでも人間であり世俗そのものであったからである。太郎丸の句だったかに

――芭蕉去って一列白き波がしら

というのがあったが、日本文学の歴史を見渡しても、個人的にみて芭蕉ほど巨大な足跡を残した人は絶無だ。「第二芸術論」がとびだしてもビクともしなかった俳句のシンは、実にこの芭蕉がいたからこそだ」と中村草田男氏も言っているが誰しも異存はあるまい。

しかし、ぼくは巨匠芭蕉より人間惟然の人間性により深い親近感を覚える。芭蕉が中天にそびえたつ巨峰とすれば、惟然はその山ろくに起伏する小丘の一つかもしれない。だが非力で足弱で、人間生活への執着に腕首をとらえられたわれわれは、小丘に足を向けて天空に巨岳を仰ぎみるしか能はないのだ。

人間には百八の煩悩があると仏典にいうが、この数だけつきたてる除夜のカネだって終いまできくには相当の時間がかかる。この百八つを半分に減らすどころか一つだってムリなのがぼくみたいな人間である。七面倒な解脱を考えすぎてノイローゼになるよりは、いっそ百八つの方々を一堂に集めて盛大に酒盛りでもおっぱじめ、その宴果ててのちの歓楽の後の悲哀感に小賢しく小首をひねっている方が性に合っている。

惟然の悲劇は、神がかりの如き天才芭蕉に密着し、その人となりにこねくり回され収拾のつかないさく乱に陥り、性格破たん者的末路で滅んでいったのである。俗は俗に徹し、人間世界のまっただ中で身をかむ孤独にさいなまれることこそ、人間の定石ではないか。人無き山野に起き伏しして、仙人になったところでそれはもはや人間とはよび難いし、生きるに何んの甲斐があろう。

裏長屋の人海の中や、団地の何階かの共同炊事でタルの中のイモころのように地肌をひんむかれ喜怒哀楽して死んでいく。この末路の哀感の寂りょうこそ「人間本然の旅人」ではなかろうか。

とにかくあなたは時として独り居の中にみませんか、肉体からフワーッとカスミのように離れて立ち去っていく自分自身のタマシイの姿を。

「一体おてまえはどこへ？」

と置きざりにされたぬけがらがきく。

「さあね」

半透明のビニール袋の空っぽのようなそいつが、のんびりした顔であたりを見回わし上をみた。

「誰もおらんとこへ行くよ、われは愛す彼の遙かなる雲を……」

生半可なボードレェルのようなことをいうて消えた。だがそのタマシイは、やがてアルコールを胃袋にいっぱい詰めこんでよろめきながら抜け殻の中へ戻ってきた。

「おれのことは誰もわかっちゃあいてくれねえ、それでいいんだ、おれはオレさ」

タマシイは芭蕉を気どってそういうなり、たちまち痴呆のように眠りこけていった。それを抱えてぬけがらは惟然の如くブ然としてこうつぶやいた。

「雲に鳥か、こいつはやっぱり生臭いわれわれの手の届くところのものじゃないわい」

やっぱりそれは俗臭とは絶ち難い人間の宿縁で、惟然の涙こそわれわれのものである。

「川柳眼について」

餅と団子

長野文庫

岡山の吉備団子と全く同じような菓子で当地にさくら餅というのがある。味も形も殆んどよく似ているから若し吉備団子をさくら餅の箱へ入れたらさくら餅と間違えるし、その反対にさくら餅を吉備団子の箱へ詰めたら吉備団子だと言っても差支えない位似ている。

さくら餅しか知らない人に吉備団子を食べさせたら「これはさくら餅だ」というだろうし、吉備団子しか知らない人にさくら餅を見せたら「これは吉備団子だ」というに違いない。味も形も同一とすれば容器とレッテルでこれを判断するより方法が無いから。

川柳の雑誌に屢々俳句らしいものが載っている。それはその選句者が俳句と認めず川柳だと見たからであり、俳句の雑誌に川柳が載っているのは俳句の選者がこれを俳句と認めたからである。川柳人が「これは川柳である」と言っても俳句選者は「これは俳句だ」というに違いない。つまり俳句の作家や選者は俳句だと言い、川柳の作家や選者は川柳だという句がいくらでもある訳だ。同じ作品を一方は俳句だと言い一方は川柳だというのは、あたかも吉備団子屋はさくら餅を吉備団子だと言い、さくら餅屋は吉備団子をさくら餅であるというに等しい。

中には俳句雑誌に載っているから俳句で、川柳雑誌に載っているから川柳だと簡単に割り切る人もいる。丁度イチゴやトマトや西瓜を果物屋で売っているから果物だと思っているのと同様である。俳句誌が川柳を俳句として扱い、川柳誌が俳句を川柳として扱うことは出鱈目も甚だしいが、近代俳句と近代川柳との間に殆んど差別が無い以上どうにも仕方のないことではあるまいか。

私が「これは川柳だ」と俳句雑誌掲載の川柳を指摘しても「いやこれは俳句なのだ」と言ってしまえば打ち返えす言葉が無い。否それを川柳だという根拠はある。明らかに川柳の条件に叶っているのだが、相手が近代の俳句はこうなっているのだ、これが俳句なのだと言えば水掛論に終る外ないだろう。諷刺とか諧謔とか人生批判とか何のかんのと言ってみても「それは近代俳句精神と同一だ」と突っ放されるにきまっている。

イチゴや西瓜は学術的に野菜の部類に属するからたとえ果物屋が「西瓜は果物だ」と言ってもそれを否定する理論的な根拠があるが川柳家が川柳を川柳と言っても俳句と称して作っても川柳であることを認識させること、それ等の作者を川柳界に活躍せしめることの二点に尽きると思うのであるが、団子を餅であると言ってみても団子屋の数が絶対的に多く而も世間一般に「団子である」と思い込まれている場合「餅だから餅だ」といくら力んでみても始まらないのである。岡山の人に「吉備団子を吉備餅と言え」と言ってみるのに等しいではないか。

俳句は川柳で無いのと同様川柳は俳句でないのである。だから川柳を俳句だと言われてこのまま容認していることは許されない。

更に「川柳はあくまで伝統を守り本格川柳を逸脱せず純粋に生くべし」との説があるが私は肯定しない。凡そ本格とは何か純粋とは何か、古川柳の伝統を守ることが必ずしも本格ではない。純粋川柳とは俳句性絶無の句と解するがそんな川柳が果して存在するか疑問だ。

理想的には純粋で本格的なものでなければならないだろうが、だからと言って本格と称し純粋と称すること、それを求めることは不可能に近いのではあるまいか。

若しも川柳界が本格を主張して「お前がたのは川柳では無いから川柳と呼称すな」と言うのは川柳自身の自縛で却って川柳を誤まるものと断言し度い。

☆作家がこれを否定すればどうにも仕方がない。つまり近代川柳と近代俳句に百米と百十ヤードの差もないのだから止むを得ぬ。恐らく将来この状態は益々混線しレッテルと容器で判断する外なくなると思うが如何。

例えば近頃の学校教科書は殆んど口語文体になっている（高校教科書の如き殆んど左横書きになっている）。この教科書で学習した若い人々が俳句を作る場合その作品は恐らく昔の俳句と違ったものを作るにきまっている。左記は今治市H中学校の文集に載っている俳句であるが、

猫やなぎ猫によく似た面白さ　重見

こいしきは故郷の山の紅葉なり　村上

つくしの子ちょっと顔出し覗いてる　越智

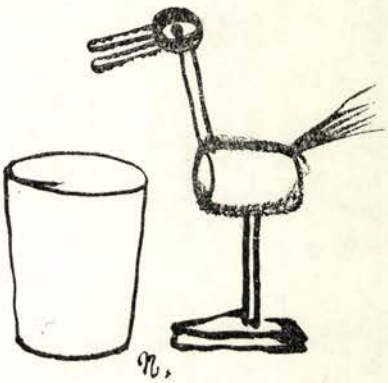
春風が花の香りを運び来る　吉田

春の風さざなみとなる広い海　笠崎

これらの作者が俳句という名のもとに川柳を作ることは極く自然の成行きだが、川柳人が「それは川柳ですよ」と言っても容易に肯かないだろう。「それは団子だ」と言っても「イヤこれは餅だ」と言えばそれ迄である。

それでは川柳人はこれ等の近代俳句作品に対してどういう態度であるべきか、これ等近代俳句作家群をどう遇すればよいのか。

病気と川柳



北川春巣

私は二十数年間、内科の医者をやっております。医者の玄人であります。本日、第十四回市民文化祭川柳大会に当り、「病気と川柳」のお話をすることになりました。過去十三年、毎年この川柳大会は行なわれて来たのでありますが、いつもは川柳作家ばかりが集まりまして会をやっており、「市民文化祭」というにはふさわしくないのではないか、というような批判も出まして、今年は、今まで川柳を作ったこともないような方々にも集まって頂いて、川柳というものを認識し、ひいては川柳を楽しんで頂こう、ということで、後ではまたバィオリンの演奏を余興に聴いて頂こう、というような趣向になったのであります。

私ははじめに申しました医者でございます。専門家であります。所が川柳は専門家ではありません。川柳では素人（アマ）であります。川柳の世界は専門家（プロ）の非常に少ない世界であります。川柳の専門家は日本全国に恐らく数人しかおられないのではないかと思います。専門家の第一号は、ここにおられる路郎先生でありまして、昭和十一年に「専門家なき社会は発展せず」と叫ばれて専門家になることを宣告されたのであります。その後、そのような宣告をされたかどうかよく知りませんが、全国に数人の専門家がおられるように聞いているのであります。その他の人々は、ここに出席されておられる方もほとんど、私をも含めまして、みんな川柳の素人であります。また川柳には、柔道三段、剣道五段というような「段位」もありませんし、お華の初伝、お茶の中伝、奥伝というような免状もありません。ただ川柳をやっておる年数が長いか短いかの違いだけでありまして、新人作家、中堅作家、ベテラン作家などと言っております。きょう、生まれて初めてここで席題を作られた方でも初心者と言ってよいと思います。

私の川柳は医者と同じくらい古いのでありますが、きょうは初心の方々に、川柳とはどんなものか、どこが面白いのかというようなことをお話しする責任を持っております。しかしそうしますることはベテランには退屈なことになり兼ねませんので、そこの所は私の専門である病気の話でご辛抱願いたい、とこのように考えておる次第であります。

川柳という言葉をはじめて聞かれ、川柳をはじめて見られた方々は、川柳とは滑稽なものである、川柳は滑稽句である、というように考えられた方が多いのではないかと思います。実は私も初心の頃はそんなふうに考え、またそんな考えで作句もしておりました。しかしだんだんやって行きますうちに、川柳は必らずしも滑稽俳句ではない、ということが分って来たのであります。そのように川柳は滑稽俳句と間違えられますほど、見た形は俳句に似ております。いや、俳句と全く同じに五、七五と十七音字でできておるのであります。俳句と違います所は、川柳は私達が平素しゃべっております話し言葉で作ればよろしいので、俳句の切れ字がはいったり、文語調で作るのと違いまして、羽織・袴をぬいだ感じがございます。羽織・袴を着ておりますと、余り洒落をいうわけにもいきませんし、威儀を正していなければなりませんが、着流しになりますと、そのような緊張も解けますので、つい駄洒落が出たり軽口も出たりしまして、人間の心があからさまにさらけ出され易くなります。滑稽な所があると思われるのは、その一つの現われではないかと思います。

以上は見た所の形式の違いでありますが、内容も俳句と川柳は違っております。俳句は主として気候や自然の景色などを詠みますが、川柳は主として人間生活について、その状景や人間の心理を詠むのであります。先程屯坊氏が「開会の辞」を述べられました時、先ず冒頭に、「快晴の秋日和のきょう——」というふうに言われました。あれが俳句でありまして、その後に述べられましたもろもろの事柄が川柳なのであります。俳句と川柳とは、このような関係にもあるわけであります。

さて、次は病気のことに移りますが、「人間は病の器」と言われておりますように、私達自身、あるいは私達の家族、親しい人、まわりの人、誰かがいつも病気をしております。川柳作家はその機会を捉えまして、その様子なり心持なりを川柳に作るのであります。「川柳雑誌」のどの号を見ましても、病気の句が載っていないことはないくらいであります。それらの句を見ますと、作者が病人でもないのに病人であるような表現をしたり、病人であるのに病人でないような表現をしたり、しているのに気付きます。これは川柳が僅か十七音字で綴ります関係上、字数の関係で主観的なものを客観的に表現したり、客観的なことを主観的に表現したりしてあるのでありまして、川柳ではこれは許されることであります。いずれにしましても、みな自分の体験であることには間違いないのであります。そして多くの病気を詠んだ句を見ますと、専門家の私が感心しますことは、川柳家がみな、病気に関して観察力の鋭いことであります。逆に申しますと、川柳をやっておりますと、観察力が鋭敏になる、と言えると思います。

例えて申しますと、これはいつも例に引くことですが、肺結核のことであります。結核は古くからある病気でありまして、もう紀元前にギリシャの名医ヒッポクラテスが記載しているそうであります

す。江戸時代、川柳がはじめられた頃には、もちろん十分知られておりましたけれども、結核が伝染病であることはまだ知られておりませんでした。結核が伝染病であることが分かりましたのは、ドイツ人のコッホという人が結核菌を発見して（一八八二年）からのことでありますから、川柳のはじめから約百年後のことであります。その結核菌の発見前、江戸の川柳作家は肺結核のことを「癆咳」と呼んでおりました。そしてまた「癆咳」とは「恋患い」や「失恋」をも指しておりました。つまり「肺結核」と「恋患い」「失恋」とを同じものと見ていたのであります。

癆咳の母は近所のどらをほめ　古句

という句があります。「どら」とは「道楽息子」のことです。肺結核の息子を持った母は、近所の道楽息子をほめて、せめて自分の息子があのようであってくれたら、といった、という句であります。この句は客観的に詠まれておりますが、前に述べましたようにあるいは「母」が作者で、主観を客観的に表現したと見てもよいのであります。

癆咳の元トは行儀をよく育ち　古句

という句もあります。深窓に行儀よく育ったいとさんが癆咳にかかったのでありますが、その原因は箱入娘にした所にある、と断定しているのであります。

「結核」と「恋患い」とは全然違うではないか、川柳家は観察力が鋭いとお前は言ったが、それはどうしたことか、と言われる方があると思いますが、実はこの観察は間違っていないのであります。結核はもちろん結核菌の感染がなければ起きない病気でありますが、結核菌の感染がありましても必らずしも起きるとは限らないのであります。現代の精神身体医学的研究によりますと、結核菌初感染当時に、たまたま精神的の悩み（ストレス）や、身体的の過労がありますと発病し易いということが分って来たわけであります。またいくら療養所にいて肉体的には安静を保ち、化学療法のストマイやパスやアイナの恩恵に預っておりましても、精神的にストレスがありますと治りにくいし、また悪化もするという症例が数多くあるのであります。江戸時代の癆咳が、恋患いや失恋のために発病した、つまり癆咳も恋や患いとは同じものであると見てとった、当時の川柳家の観察の鋭さはすばらしいものだと私は思うのであります。

医者の側から病気を分類しますと、先ず治る病気と治らぬ病気というふうに分けられます。医者が治すのでなくて、「自然」に治るのであります。「自然が治して医者が助ける」という有名な言葉がございます。治る病気にしましても三日か五日で治る風邪引きや腹下しのようなものから、少なくとも一ヵ月はかかる肺炎のようなものがあり、また一年も二年もかかる結核のような病気もあります。結核は昔は不治の病だと言われ、多くの人々が結核で死にましたが、現在ではもう不治ではなくなりました。しかしそれでも治るのに相当の年月がいります。次に治らない病気の代表にがんがございます。今、多くの学者ががんを治す薬を一生懸命に研究しておりますから、そのうちにがんも治る病気だと言われる時代が来ることと思いますが、少なくとも現在の時点におきましては、がんは治らない病気であります。ただ早期にこれを発見して手術でこれを取除いてしまうことによって、がんは治ったと称するわけで、その人を死から救うことができるのであります。その他、成人病と言われております一連の病気もその中にはいると思います。例えば高血圧症は、年を取ると共に血管が硬化するために起こるのでありますが、その中でも新陳代謝異常で起こる血管のアテロ硬化症が悪性であります。動脈硬化が起こりますと心臓は余分の力を出して働きませんと血液が全身に送れない。そのために血圧が高くなるのでありますが、またそのために心臓は肥大しますし、従って心臓自身が配給を受ける冠状動脈からの血液では足りなくなって心臓は衰弱を来すようになります。そんな人はまた、冠状動脈の硬化をも持っているわけですから、それだけでも心臓へ行く血液が不足しまして、僅かの運動で狭心症を起こすとか、冠状動脈が閉塞しますと、心筋硬塞という病気を起こして頓死（心臓麻痺）することがあります。脳の動脈も硬化を免かれませんので、そんな人に高血圧が起こりますと、脳出血を起こして参ります。脳出血を起こしますと、そのまま死んでしまうこともありますし、死なずにすみますと、半身不随で俗に中風と言われる状態になります。高血圧症は若い人にも起こりますが、この場合は動脈硬化はなく、動脈の痙攣によるのだと言われております。痙攣の原因はよく分っていませんが、ストレスが関係するとも言われております。長い間痙攣による高血圧が続きますと、二次的に本当の動脈硬化になって参ります。いずれにしても、そんな具合で高血圧症は恐れられておりますが、高血圧症があるからと言って、すぐに死ぬわけではありませんし、気分を大らかに持ってこまかいことにくよくよせず、川柳を作って憂いを忘れるのが長生きの道だと思います。そして、今までの経験を、大所高所から若い人達にアドバイスすることに満足を見出してほしいものと思います。

厚生省発表の昨年度の死因別統計表を見ますと、多い順から①脳出血、②がん、③心臓疾患、④老衰、⑤不慮の事故、⑥肺炎、気管支炎、⑦結核、⑧胃十二指腸疾患、腸、大腸炎、⑨自殺、⑩新生児固有の疾患、性質不明の未熟児、となっておりまして、第一位から第四位までがいわゆる「年寄りの病気」であります。また年令別にみますと、三十才代では結核は治るとは言いましたが、昔から恐れられている通り「結核」が死因の第一位を占めており、四十才から五十四才までの年令では、がんが死因の第一位、結核は減って脳出血や心臓病がふえて来ております。五十五才から七十九才では、脳出血が第一位で総死亡の三割前後となり、次ががん次が心臓病という順序であります。全年令における死因の順序と同じだということは、この年令におけるこれらの死因がいかに多いかということを示していると思います。八十才以上になりますと老衰で死ぬ人が多く、脳出血、心臓病がこれに次いでおります。八十才以上になると、がんは少なくなると申しますが、がんで死ぬる人は、この年令までに死んでいるのだ、ということになるかも知れません。

川柳作家は、以上色々の病気を見つめまして、川柳を作っておるのでありますが、前に申しましたように、私が感心するような句もございます。その一部を、私「川柳雑誌」から拾い集めましてプリントにして参りました。それらについてこれから少し説明して行こうと思います。

（つづく）

電話と杖

――香林・若菜を憶う――

麻生路郎

昭和三十七年九月下旬のことである。弓削の鉄児君から、読売新聞の地方版に載った十行余りの切り抜き記事を受けとった。「一読して香林氏ご夫妻と思われるので一応お知らせする」との添書があった。

九月十六日、徳島県三好郡池田町西山の箸蔵山で発見された男女の白骨死体の身元を池田署で調べていたが、二十二日岡山市門田屋敷、武部量義と妻の貴久子とわかった。量義さんが三年前に失明、治る見込みがないところから云々と報じられていたのであった。

そうした悲報に接した私は、事体が重大なので、慎重の上にも慎重を期し、一方岡山の千田富佐与さん（若菜さんの妹）へ詳細を知らせてくれるよう依頼状を出し、一方では不朽洞会の中島生々庵理事長に報告し、今後の打合せをしておいて私は予定の関東への旅へ出た。五日間の旅から帰阪後、千田さんからの返書によって、新聞の誤報でないこともわかり、遺品による香林・若菜の死を確認したので暗然となった。

人生は由来風の如く来り、雲の如く去るものである。香林・若菜の人生も例外ではない。二人の行動に対しては批判的な言動は一切避けたい。彼等の行きついたことをもって、すべてを是認してやることが、仏への供養だと思っている。

少しく、故人の憶い出を語ってお互いの淋びしさを薄めよう。

香林と言えば電話のことが思い出される。よく電話をくれたものだ。ひる過ぎに電話のベルが鳴ると、「香林さんだッせ」と言う。その話がまた長いんだ。おそらくうちへかかる電話で、香林ぐらい長い話をする男はいない。彼は一日に三百八十回もかけたという通話ホルダーだから、こちらは参いってしもう。もっとも私に、そんなにかけて来た訳ではないが、文明の利器をフルに駆使する点は、電話に弱い私等は足元にもよりつけない。話はすべて川柳のこと「川柳雑誌」のこと、川柳不朽洞会（副理事をしていたので）のこと、支部のことで、それ以外の話はなかった。いつもは静かな男であるが、川柳の話となると話に熱を帯びて来て、語気が荒らくなった。そのことを思うといかに彼が社のためや会や支部のために全力を尽くしていたかが想像出来るであろう。昭和二十八年に、私の川柳生活五十年を記念する句集「旅人」刊行や、アベノ百貨店で開催した川柳展共の他についても、わ

香林・若菜逝く

香林・武部量義氏、若菜・武部貴久与さんのご夫妻が讃岐路の旅先で亡くなられた。物故された日は不明だが、警察の鑑識課では三十七年の早春と推定されている。愛惜の情に堪えない。

香林氏は明治三十年五月二十九日生、出生地岡山市。享年六十五才。真研慈香信士。若菜さんは明治三十二年八月十七日生。出生地岡山市。享年六十三才。浄峰若菜信女。

香林氏は昭和十七年に不朽洞会に入会。後、副理事長の重責を果たされた。若菜さんは昭和三十一年に不朽洞会に入会。夫妻とも昭和三十六年九月不朽洞会員を辞された。

（写真は香林氏）

香林句抄

ローソクがホ、ホ、ホ、と崩れたり
先生の還暦僕は墨をすり
素足になって見給え春が来ているよ
畦食いに似たる生活も差し向い
魂を圧して滝のドドドドド
荷造のように湿布をしてもらい
妾宅と言えず一寸そこちょっとそこ
暗がりを蛍は夢の国にして
父は飲み家出の母は美くしし
足らぬとこだけ奥さんが口を入れ
日曜を休まぬ社長もてあまし
青春期空を歩いているような

が事のように進行係をやってくれたものだ。殊に後進の指導に親切で倦まなかった。

彼をはじめて知ったのは戦前に、私が松坂屋の七階の文化クラブで川柳講座を担当していたころである。その頃には冷房装置はなかったが、夏には扇風機をかけ一人一人に硯と筆を渡して作句させたゼイタクな講座であった。作句が出来ると、一人ずつ私の机の前に出て、朱筆で真ッ赤に添削されたものだ。ここに学んだ人たちの多くは何れも、優秀な作家として柳界に知られているが、香林もその一人であった。惜しい作家に世を早めさせたものだ。

彼が眼を病んでから、もう七、八年になろう。後年、堺の塗料会社に勤務していたころ、階段が一枚板に見えるような眼で、オートバイにハネられたことがあった。大したケガでなくてすんだが、色彩を見分けなければならぬ職業柄であったので、殆んど見えぬようになるまでガン張っていた。

句会などへも、若菜さんを杖がわりにして、大阪にいるかぎり、最後まで、本社と支部だけは、出席していた。それは実に涙ぐましい努力であった。それだけにいい作品を遺している。

私は彼に、盲人杖を持つことをすすめたが、「薄っすら見えます」と言って、なかなか持とうとはしなかった。そして私たちをハラハラさせた。

「ガンコで困りまんネ」と若菜さんはぐちった。

「こないだも地下鉄を下車してHデパートの方へサッサと行こうとしますので、そこは行かれしまへんと言っても、なに行かれんことがあるか、入口があるやないか、と眼のあいた時の記憶でガン張りまんネ」と若菜さんはそのガンコさを証明するようにいうのである。

香林の言い張るのもムリはない。たしかにそこには入口があったが、現実はそこにはもう入口はなかった。デパートの絶えず改装もいいが、盲人にとっては罪な改装だと思った。年のせいもあろうし、眼の見えないヒガミもあったろうが、彼のガンコさは彼が信念の持主だったのに起因することが多いのではなかったか。そこに若菜さんの労苦が加重されたことは言うまでもないが、その愛情が箸蔵山まで続いたとすれば香林もって冥すべきではなかろうか。

三年前に、彼は長年住み馴れた大阪をあとに郷里の岡山市に帰った。特に音響に悩まされていることを訴えて来たが私等の力ではどうすることも出来なかった。山へ這入ることも言って来たが、なかなかに徹しきれないものがあったらしい。

失踪前に、不朽洞会を辞し、柳友にことずけて、彼の「川柳日記」二冊が私の手許に届けられた。その内容は自分が携っていたころの、「川柳雑誌」や「川柳不朽洞会」や「支部」のことが主で、香林の個人的な感想は稀少である。

香林は忘れっぽいからと言って、何んでもかんでもよくメモを取ったものだ。彼の遺してくれた「川柳日記」より、そのメモの方が残っていればよいのにとは思うが、それも用件本位のものかも知れない。

夫妻のことはいくら書いても書き尽せないので、茲に二人の冥福を祈って筆を擱くことにした。

若菜句抄

宿替えの荷物となって手をひかれ
すれちがうものみな風を切ってゆき
頬にふれるは秋の手のひら
閑居して新種たばこの名も知らず
喜びが犬の所作ほどあらわせず
淡々と座食する身へ置炬燵
世情騒然撲りたくなるもの多く
猫だったのか誰も返事せず
二十五でもう税務吏は家を建て
無に佇てば眼のないことも忘れてい
信頼に応えんとして身を削り
見えていた頃の知識でわたり合い
バラ展で女の匂い邪魔になり
皮膚一枚そとはきびしい現実か
支えあればめくらのんきな事も言え
敷きのしの重しとなっただけで暮れ

欲もなき別荘番へ花が咲き
学説をまたくつがえす法隆寺
二人ずつ二人ずつ居る仲之島
酔ざめに豆灰白くくずれたり
盲愛の手をぬけ風の中の子等
淀君の眺めた堀へ労働歌
お二人様と言われて固くなる二人
銭湯の大きい声はうちの人
二世までも嫌と女の笑い合い
おっさんのズボンで林檎ふいてくれ
スピッツにはよくしゃべる口もっていて
がんとして下座に女らしいる
車車流れ作業のように来る
酒の味芝生が少しあればよし
妻の眼が問に合うてくれない医学
松籟に聞き入るは墓と私と

ああ、香林さん

清水白柳

昭和三十六年十月一日付で香林さんから分厚い封書が届いた。それは原稿用紙の裏を使って鉛筆書きのものだった。一行一行を折って手探りで香林さんが書いたのだろうと思われる手紙であった。若菜さんが読み返して処々に脱字があるのを書き入れてあったのである。その手紙は次のような内容である。

さて私共帰郷一年半になります。岡山に帰って三四ヵ月経った頃、私の神経（交感神経異常緊張）もすっかり快くなり喜んでおります。広い庭園を持った家が多く其のまん中に小さい拙宅があるのです。うちの裏もお隣りの庭園です。随って早春の頃など色々な小鳥が飛んで来て森の音楽を奏でてくれつい二三日前まではつくつくぼうしの夏を惜しむ声が聞こえていました。この頃は虫ですがみなお隣りの恩恵です。神経が治ったのもその精だと思います。しかし、最近ピアノその他の騒音が増え今後の保養に適さぬようになりました。大阪に居る頃「山に入るのが一番よい」と独語していたものですが、それがどうやら実現しそうになりました。

実は山の寺に入ることに決定いたしました。それでこの際思い切って川柳界から退くことにして、静養と作句と人間研究に没とうすることにいたしました。不朽洞会も退会しました。今後の作句はどこにも発表しません。

昔の坊主のまねをするわけでもありませんが、本当の孤独になることも望みの一つであります。どうぞ風変わりの奴と思っていて下さい。雅兄には一方ならぬ御高情をいただき感謝の言葉もありません厚く御礼申上ます。みなさまにいちいち御挨拶も書けませんので勝手ですが柳友諸氏にお逢いの節御鳳声のほど御依頼申上げます。雅兄には新人指導をおつづけのことと存しますがどうぞよろしく御願い申上げます。尚、御一門みなさまの御多幸をお祈りいたします。

うしろがみを引かれるものがありますがこれで擱筆いたします。

いずれお便り差上げるまで、私の行動お許し下さいますようお願いいたします。

武部香林
36・9・30

清水白柳様

不朽洞会を退会ということが内容にあったので早速理事長にお伝えしたのだが香林さん御夫妻はもうその時は家を出られたあとであったので連絡のとりようもなかったのである。私は私で返事を書いたのだが、いずれお便り差上げるまでということを信じてその便りがくるのを待っていたのだったが、とうとう来なかったのだ。そして一年経った今日聞かされたのは訃報であった。ただがっくりするだけである。

少しがん固なと思われる程生真面目であった香林さんが何故か私とうまが合ったというのか、よく色々な事柄を川柳に関することだが話合ったものである。そうしたことがこの手紙とは別に原稿紙に二枚もこまごまと認めてあって、香林さんが最後まで川柳のことに執心を持っておられたのが思われるのである。いまそれを読み返して見て香林さんと話合っているように感じて殊更に胸を打たれている。岡山へ帰られる前に上の宮の家までわざわざ短冊を持って来て頂いたのがおわかれの最後だった。せめてもう一度お便りがあったら何とか手の打ちようもあったのにと悔やまれてならないが詮なきことである。——合掌

よみじ安らかに

——武部ご夫妻の思い出——

早川清生

秋風が肌にあらたな日突然ご夫妻の痛ましい訃を聞いた。秋思ことに深い。

顧みると私がご夫妻の知遇を得ていた時期は、かつて宙天に輝いたご一家の運命がようやく夕暮に近づきそしてすべてが暗黒の闇に没し去るまでの間であった。当時川柳をはじめたばかりの私は、柳界に一人の面識もないまま、職場に近い関係から三津屋にあったご夫妻のお宅を訪ね、初対面の香林さんに淀川支部への入会をお願いした。

支部は水洞、花村、東洋男氏らの俊秀があり、かつて多久志、山茶花氏らも在籍したが、その運営はほとんど氏の考えに従っていた。これは香林さんが支部を作り、かつ育て上げられたという理由からではなく、みんなが氏のほんとうの価値を認めていたからであろう。当時の香林さんはまだお元気で、川柳の社会的浸透に非常な意欲を燃やしておられ、不朽洞会の副理事長なども勤められてご活躍もっとも著しいときであった。私生活については私などほんの管見するに過ぎなかったが、お仕事も順調で、その孤高な資質と信念を貫くご性格からときに世の誤解を招くことはあっても、お二人きりの円満な日々は日常の些事によって感情のたかぶることもなく、嗣子のない悩みなども心中すでに達観しておられたようであった。

ペンと煙草とペンと煙草の
忙しさ　　香林

日曜を休まぬ社長もてあまし
足らぬとこだけ奥さんが口を入れ
ちょうどよいとこへ豆腐屋売りに来る
銭湯の大きい声はうちの人　　若菜

などにご生活の一端がうかがわれる。支部の句会は毎月お宅で行なわれ、興が至れば試みられる柳話に柳歴の浅い私など大いに啓発されるところがあった。川柳ばかりでなく、広い方面にもご趣味をもっておられて思いがけないお話を聞くことも多かった。たとえば造庭にも深いご見識があり、お庭の

灯籠や苔について興味深い説明を聞いたこともあった。

舞台が暗転する。不幸な人は予期しないすき間から襲いかかる。はじめは気にもとめず近所の医院に通っておられた眼疾が意外の難症とわかり、転医と入院が続いた。しかし氏の意気はまだ衰えずお訪ねするたびに病いに克つ法を述べ川柳を説かれた。区役所の粗末な応接室で長時間柳界改造のご抱負を伺ったこともしばしばであった。香林さんといるときいつも私の方が口数少ない聞き手であった。そんな間にも病魔は氏の意志に反して氏の人生から光明を一枚ずつ剝いでゆき、勤めも退かれ、若菜夫人との盤居の日が多くなった。

頬にふれるは秋の手のひら　香林

いくたび秋の掌が氏の頬と不安な思いとを支えたことであろう。その頃から私も次第に多忙となり、役所への各種の手続をお手伝いするときなどにお会いするだけとなった。香林さんからはいろいろ話したいから時々顔を出すように言われ、ご夫妻からの書簡はすべて大切に保存しているが、その時分に夫人の代筆で頂戴したものがもっとも長文であり数も多い。また街の騒音は香林さんの神経をいらだたせ、この頃から音のない世界がお二人のあこがれの境地となっていた。内助外助の功うるわしい夫人のことは柳人によく知られ、香林さんの稿ともなって遺されたが

妻の眼が間に合うてくれない医学　若菜

の思いは文字通り毎日を氏の手足となって送られ、郵便局へ会場を移した支部の句会が終った暗い道を、お二人が手を結び合うて帰ってゆかれた姿が今も眼に浮かぶ。

すれちがうものみな風を切ってゆき　香林

宿替えの荷物となって手をひかれ

ご夫妻が郷里岡山へお帰りになって一年半ほど後の昨年盛夏、私たちは支部句報百号記念大会を一泊の岡山で開いた。ご夫妻はたいそうよろこばれて、会場や岡山柳人へのお誘いなど種々ご斡旋をいただいたが、会のあとみんなでお宅へ伺ったときご夫妻の古い柳歴を語る多くの柳書を分け与えられ、私には研究テーマとして「革新川柳批判」をとりあげるよう勧められ、その骨子や柳壇における資料の所在など丹念に話された。ところが帰阪して九月になると私にご夫妻から小包やお手紙が相ついで届き、貴重な短冊や写真やパンフレットが何回も送られてきた。そして最後に九月二十八日の日付で香林さんの原稿紙二枚の裏に書かれたお手紙が届いて、研究テーマの完遂を求め、不朽洞会を退会してこれから「静地」を探して「山の寺」へ入ると述べられたあと過分の謝辞が続き、「さようなら、さようなら」で終わる直筆と夫人の添書とがあったが、私は迂遠でついにお二人のお覚悟を知ることがなかった。

「川柳こそ私の生命」とは香林さんご自身の言葉である。ご夫妻は川柳の正統を守る数少ない柳人として多くの名句を遺されたほか、柳界へのご功績も多い。川柳のみが支えであった晩年のご夫妻にとって輝かしい柳歴は現在の闇を過去から照らす唯一のともしびであったろう。

いまお二人はやはり手をとり合いながら秋の黄泉の道を急がれるのであろうか。ご冥福を祈り心から哀悼の誠を捧げる。

松籟に聞き入るは墓と私と　若菜

金泥集

麻生葭乃選

「月末」

月末を気楽トンボは糸を垂れ　阿茶
月末の金自家用で借り歩き　同
月末に掛が予算を上まわり　同
月末は銀行も知恵を貸してくれ　一栄
月末の帳面黒字金はなし　同
月末のおしきせ一本減らされる　同
月末に来た珍客をもてあまし　きさ子
月末の臨時収入拝まされ　同
顔のきく店で買うとく月の末　清子
前借りでやっと月末きり抜ける　同
月末にのばした借へ居催促　徳子
月末にお花お琴としぼられて　同
月末に来いと催促はねられる　陽子
月末にやむなくへそくりはたき出し　同
支払いに足らず月末さとで借り　勝子
予算外の出費月末あわて出し　同
月末へ拍車がかかる手内職　好女
月末へまたなきごとの子の便り　同
月末は居留守を使う日もありて　周甫
二十日過ぎそろそろおかず質素にし　あいき
月末へ小切手ばかり書かされる　美喜
容赦しませぬと十二月突進し　美代

次回題「恵方」〆切十一月末日

愛別離の苦

不二田一三夫

香林氏と若菜さんの母堂同士でお二人の結婚を約束した。従兄妹同士は二十五才と二十三才で結ばれたのである。

「貴いちゃん」とよんだお下げ髪のころから最後まで一緒だったことに、ぼくなど小さな妬みさえわくご夫妻仲だった。

昭和17年に不朽洞会員（鮎美氏推薦）になり、三代の副理事長として活躍された。昭和3年（32才）山陽新聞に処女作を発表

—死んだ児の顔を見つけた夏祭り

昭和36年本誌9月号に

—大鯛をもろうて夫婦もてあまし

—長靴へ蛙を入れて子がもどり

—もっと食わせもっと飲ませとデモるなり

これが氏の最後の作品となった。30年冬ごろから視力がうすれだし、けっきょくは失明されたが、帰郷されてからもよくご寄稿をたまわった。36年7月号の〃オーミステーク〃が最後の原稿だった。この36年の秋ごろから香林、若菜ご夫妻に心境の変化をもたらせたようである。四国路を愛妻に手をひかれて行く香林氏を思うと胸が裂りさけるようだ。

近作柳樽

麻生路郎選

北川春巣選

生活に追われた声で子をしかり　大阪市　吉田　季生

出世欲持たず囲碁だけ強くなり　同

替え玉の自首へボスがついてくる　同

蚊の多い所で早寐のくせがつき　同

筑豊炭坑地帯で

がら空きの社宅に残るつばめの巣　同

小金蓄めたかそろそろ石を集め　兵庫県　河原みのる

花作り人に知られぬ鋏だこ　同

おおげさな仏壇継ぐ子ないという　同

横綱大関今日も安泰なさけなし　同

堀江君帰国

縄かかる筈の首やがレイをかけ　同

結納に化けた畠を小作する　枚方市　宮川　珠笑

うっぷを晴らしに下戸が来てる寄席　同

ちり拾うことを知らない女子大出　同

姑のあとへ嫁さん愚痴りに来　同

ミス続き課長に休暇勧められ　同

独身の自由は蚊帳へ斜めに寐　岡山県　藤原　秋月

只酒を飲む時別な笑顔する　同

刺青から真赤な汗が流れそう　同

期限前割引も無く納税す　同

汚職した顔悠々と切るチップ　兵庫県　常岡　孝風

踊り子の食欲裸で食うラーメン　同

秋の夜の詩想の中に君を置き　同

じゅたんに今日の思想は死んでいた　同

ラテン音楽恋の序曲の地下茶房　京都市　小黒　王石

一生を行けそうもない姉妹都市　同

団地の灯クロスワードの様につき　同

じゃんけんで何をきめるか若夫婦　同

若者に席譲られて面喰らい　奈良県　草深　酔升

洋服に雪駄不敵な面がまえ　同

労働歌うたって株も買うており　同

川柳における

〃生〃の拡充と

燃焼の問題について

直原七面山

御承知のように、美は芸術の最高の目的であります。

従って、芸術の一翼を担う川柳もまた当然美の追求でなくてはなりません。

そこで私達川柳家は、美の追求の手段として十七音字詩を選び、それによる句を創作して社会に発表し、その作品を人々の鑑賞に供するとともに、作品の真価を世に問うているのであります。

で、他の芸術作品がそうであるように、川柳作品もまた、生そのものから発現せらるるところの美的価値を具体的に表現したものでなくてはなりません。

がしかし、ここで言う生とは、これは決して生物学的な生そのものを言うのではなくして、あくまでも創造的な精神活動を中核とした生のことであります。

さて、美の相即ち美の姿、形というものは永久不変のものであります。

台風も弱いものいじめにやってくる　同

われもいつか来べき墓なり法師蟬　大阪市　堀　風仙洞

ビールおごりますと積極に出る四十すぎ　同

お寺まで鉄筋にした御堂筋　同

クルマ買いましたでとお墓へ申上げ　同

机の位置換えて民主化したつもり　兵庫県　遠山　可住

団地族の秋は虫まで購うて来て　同

町葬で乞食が一人片附けり　同

くやしさよ妻が抱いたらケロリさし　同

骨のある男の辞表受けつけず　石川県　前田百万石

白髪抜いてくれる長女にいい匂い　同

灯火親しむ頃ですなあとパチンコ屋　同

ニュースニュースざあますの子がすべり　同

お値段を賞味するようにメロン食い　豊中市　稲増　久雄

ようきいたダブルパンチに似た残暑　同

空巣でも何百万も稼いどる　同

松茸の高い話をよばれて来　岡山県　永宗　宗義

老眼を掛けて人生の裏が見え　同

故郷の野ツボが匂うなつかしさ　同

芸術のように母の手帯結ぶ　神戸市　波多野美由起

雨露をしのぐだけですと招じられ　同

スキャンダルに馴れてとり消す熱もなし　同

二階借りにもったいない月夜　仙台市　平野　光道

ニセ札に民間技術誇る国　同

振出しへもどれず赤いネクタイし　同

泣くだけでいける坊やの意志表示　伊丹市　小川静観堂

絶景へお尻をむけて写される　同

防大が三等陸尉に就職す　同

マスコット身ぶるいをさす速度計　京都市　大久保和三郎

僧の道はずさぬ寺の屋根が漏り　同

特価品着てるマネキン鼻が剝げ　同

贈られたネクタイで来る如才なさ　大阪市　藤冨　淀月

引込線錆びて顔面割る社運　同

モク拾いピースの殻をけって見る　同

無愛想の席で税まで払わされ　新居浜市　安藤　桂仙

音たてて追加のビール女房置き　同

もうよせと云ったビールの栓もぬき　同

風の視線そは童眼にふさわしく　徳山市　渡辺伊津志

葉鶏頭裸女の如くに陽に映えり　同

老教師自筆の依頼状嬉し　同

そしてなに人といえども動かすことの出来ない絶対的な存在でもあります。

で、もしも私達が、芸術の奥義を極め得たとしても、恐らく私達は、美そのものの頂点に達することは出来ないでありましょう。

なぜなら、美は計り知ることの出来ない無限の広さと深さを持ち、しかもなお最高の権威とを持って永遠の彼方に存在しているからであります。

ところが私達は、その無限の彼方に存在する美の頂点、美極致に向って日夜たゆまざる、闘争を繰り返えしているのであります。

思うだに雄々しき限りではありませんか。

従って私達は、仮令その美の究

コーヒの味

モダン川柳

心斉橋大丸北の辻東へ

御門

TEL(271)6684

御集会には階上御利用下さい

見るだけで黒部の川湯銭を とり　芦屋市　里田一ン十

アブレ見る子なき倅かみしめて　同　同

A少年自殺をさして 恬と 居り　同　同

角封筒神の愛 のみ記される　堺市　沢田 美喜

二十グラムまでのレターを書きつづけ　同　同

メガネ購入

インテリに見える眼鏡で苦 笑い　同　同

幸福な虫米びつの中に住み　竹原市　山内 静水

肉親の目にお骨壺小さすぎ　同　同

満ちたりたいびきも少し寐かせこそ　同　同

気まぐれな蟬が来てなくビルの壁　竹原市　杉原 愛鳩

留守事は妻の推理に恐れ入り　同　同

二人目はもう胎教を忘れとり　堺市　高寺 和郎

蛙の子にさせてならぬと覗き込み　同　同

貧乏の貯金すくすく子の成長　児島市　伊丹柳瓢子

ステテコで家庭教師を父勤め　同　同

弟に父母を頼んで都会に病み　羽曳野市　古川 静波

ことごとに野党にまわるおばあちゃん　同　同

補聴器のせわになりつつ虫の声　高知県　山川 勝子

痛いとこ医者もお年のせいにする　同　同

スイッチを入れて和尚も経をあげ　鳥取県　鈴木村諷子

わらんじの父を気ままにさせておく　同　同

金ペーパー貼ったりンゴの器量良し　青森県　岩淵 一星

医者許し煙草を妻がゆるさない　同　同

空気が甘いなんて浮気が旅の宿　笠岡市　松本 忠三

条件つきのクビがぽろりと転げ落ち　同　同

ゆずられた席へ老人抵抗す　羽曳野市　福井与太郎

金魚売りがめつい露路をふり返る　同　同

夜逃げする程に着込んで釣に出る　松山市　河本南牛史

七回忌母そっくりの伯母も来る　同　同

女盛り刺客のように寄り添うて　笠岡市　佐内 隆文

昔なら酒盃を出した今朝の雪　同　同

口笛を吹いて女房不在なり　羽曳野市　岡本紀太呂

お化けより女房怖い年となり　同　同

つまみ喰いどれもきれいな靴を　大阪府　桐山 清風

神酒受ける花嫁の指細う見え　同　同

台風は近づき妻は産気づく　笠岡市　谷本鈍愚坊

産業はでこぼこドライブのは舗装　同　同

極は極め得ないまでも、今日よりは明日、明日よりは明後日と言ったように、とにもかくにも、より高度な、より深えんな美の世界の創造と発見に誠心誠意精進して行かなくてはなりません。

これは正しく、川柳作家に課せられた宿命であります。

私達は常により新らしい川柳の美的価値を発見して、それを作品の上に具現し得てこそ初めて川柳作家として世の中に認められるのではないでしょうか。

しかるに作家と呼ばれている人人の多くは、ややもすればなんの定かな目的もなく、理想も持たず、計画とてもなく、ただ漠然として無意識の中に数多くの作品を粗製濫造し、これを世の中に発表して我がこと成れりとしているのでありますが、これでは作家としての、正しい川柳活動であるとは申せません。

誰れもが言っているように、芸術の最高目的が〝社会的な特質をもつ美的情緒〟を呼び起こすところにあるとするならば、当然川柳作品にも社会性が要請せられ、それによって発展するところの普遍的な共感が要求されるべきであります。

従って良き作品を世の中に送り出すためには、作家自身の内的精神の奥そこから込み上げて来る脈動（創作意欲）とともに、非常に広範な教養と深い人生体験とを併

紋位云うてはおれぬ借衣裳　大阪市　万代句念坊

女医に手を握られバーに居る気分　同

ラッシュアワーだけの恋ですせんなすぎ　新居浜市　小林　孝正

趣味欄にゴルフと書いて待つ出世　同

薪を割る妻は済まなく病んでいる　竹原市　大洲大八洲

二次会と見て料理屋は見計らい　同

病人へ小さな嘘の体温計　大阪市　山田　蛙水

もっともな顔で木戸出るストリップ　同

馬齢六十捻挫の如く起ち上れず　遠野市　鈴木　二文

馬齢六十魚拓の目玉も入れず　同

団地勤務駐在お産の世話もやき　兵庫県　斉藤たけお

拝み屋を信じ縁談とり逃がし　同

百姓を継がすオモチャが高くつき　竹原市　森井　菁居

逢って来た日だと知ってるオルゴール　同

みの虫がはや冬仕度する残暑　貝塚市　千石　快人

宜敷くやってる影へUターン　同

父ちゃんの鼾安心もし苦にもなり　宇部市　神田　豊年

サボテンのような男の口達者　同

OKの証拠涙を拭いてくれ　玉野市　小谷　仙山

文化賞草葉の陰で賞を受け　同

部下の無い身だから自分で可愛がり　大阪市　西本　保夫

青婦部にまだ四十のミスのまま　同

女王様万歳働蜂今戦死　大聖寺市　杉浦　酔羊

籠の餌に馴れて小鳥のこびを知り　同

祖母ちゃんと云われるのも金がいり　大阪市　宮尾あいき

造るより金守るのに気がつかれ　同

山の子の絵日記みんな蟬ばかり　青森県　田代　兼六

衣食足る頃に遺産が転げ込み　同

たまにデェするのも夫飼育法　愛媛県　村上　石峰

ない閑を暇にして書く般若経　同

組合の票を割らせて落選し　出雲市　中川　晃男

翳持たぬ美少女の四肢風匂う　同

東大という銘柄の回わり椅子　布施市　米田　美夫

冗談が図星だったでうろたえる　同

おばちゃんの情熱黄色い旗をふり　大阪市　川口　弘村

影法師俺より酔ってる祝酒　同

忍耐力養成病院の待ち時間　西宮市　鵜飼　鮎子

オールドミス段々植物的になり　同

せ持っていなければなりません。

なぜなら、如何にその技に長けていようとも、所詮、自己の持つもの以上のものをなに人もその作品の中に盛り込むことは出来ないからであります。

無い袖は振れないのが道理であります。

勢い作家はなによりも先ず、自己の生の内包を無限に豊かなものとするとともに、生そのものの自己発展を可能な限り拡大強化して行かなくてはなりません。

生の川柳即ちいのちある句を得るためにはその作句意欲の点においても、そこに少しの横着も、安易さも、弛緩も妥協もあってはなりません。

と同時に、作品は常に生の全的燃焼であり、熾烈なしかも時には苦悶さえも伴う程の緊張の中から創作創造されたものでなくてはな

福寿司
心斉橋筋大丸前
電話(271)三三四四番

まことに済まないが人間の顔面白し　福岡県　小田　無限
千羽鶴仲々飛べぬ原水禁　同
豊作の予報蝗の見当らず　広島県　山田スミ子
さあ二学期だPTAも張切らせ　同
豊年へ地蔵のよだれかけも新　今治市　越智　一水
チンドン屋足の裏まで愛嬌見せ　同
嘘つけぬ男ビールをつぎこぼし　鈴鹿市　吉田　俊和
やりそうな顔の写真で手配され　同
牛乳の立飲み暑さと戦わん　西宮市　白石　良圭
神聖と思えど仕事着鼻を衝き　河内長野市　森本黒天子
台風は逃腰風雨注意報　松江市　岡崎　祥月
万が一抽籤迫るに亦釣られ　茅木市　高木繁太郎
ソフトにコッポリ埋って母は病み　西宮市　沖吉　照児
使う道ありこの人を生かす道　玉島市　水粉　千翁
つまずいてよろけて手相見てもらい　川崎市　赤池　五朗
アベックで親父の見舞して帰り　羽曳野市　大谷　楢雄
背の子は背の子なりの秋祭　会津若松市　住吉　貞坊
残業の母へ散歩と子が迎え　松江市　大木たつ女
戦友の来りビールのおいしさよ　羽咋市　三宅　ろ亭
部屋住みは月給前の神妙さ　姫路市　隠岐　不酔
握手したそれだけで貸すバーマダム　神戸市　吉田　隆史
只くれるような夜店の売言葉　竹原市　脇坂　笑顔
嫉視する眼と眼舞台のそでに立ち　大阪市　山田松太郎
嘘をつく口を知ってる母の顔　松江市　岡崎　雪美
師の情知らず補習に欠席がち　大和郡山市　松本　峰水

長男別居

孫にさえめったにあえぬ世を嘆く　和泉市　末田　晃康
浪人も新学期なりプラン立て　大阪市　山地　判志
永いこと冬眠してる五つ紋　津市　嶋野ひ呂し
階段をまるくふいて娘の掃除　石川県　南　伝一
断水にじゃまな井戸から水をくみ　大阪府　石田　新石
全快のお礼参りに母達者　玉島市　井上　旭峯
白バイは無事故保証か時速百　玉島市　田辺　好女
親方がいるので今日は歌も出ず　宮崎市　野口卯之助
自殺した事を薬屋後で知り　島根県　景山　綾美
浮かばれぬまま還暦に追い付かれ　金沢市　根山　杏花
新任地当分頭を下げ続け　岡山県　岩道　博友
実力で這入ってもやっぱり袖の下　七尾市　松高　秀峰

りません。即ち作家は、自己の全的生を強力に一つの焦点に向って集中し、しかもその力を、作品そのものの中に白熱化して強烈に具現して行かなければならないのであります。

こうして生まれ出た句こそ、まことといのちある句であり、しかも、最も深い意味における芸術作品ではないでしょうか。

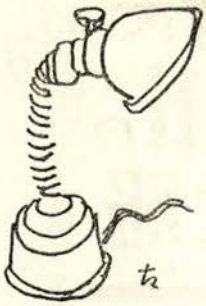
無論作句に当っては、技法も大切であれば技巧も重視しなくてはなりません。

がしかし、仮令その技法技巧が拙きものであろうとも、ともかくも優秀な作品というものは、それらの欠点をおぎなってなお犯しがたいある永遠的なものを持っております。

なぜかと申しますと、その作品の中には、作家の全的生が完全に燃焼しつくして作家自身の生ける生命とともに完べきな姿で投入されているからであります。

従ってこうした作品は、如何に時代が移り変わり時が流れ去ろうとも、決して亡びることなく、あたかも美が無限の生命をもっている如く、これらの作品もまた、永遠の彼方にいのちある句として生き永らえて行くのであります。

さて私達が、少なくとも川柳作家と自負するからには、先ずこの辺のいきさつ位は充分心得ていてしかる後に川柳活動に精進したいものであります。



私の本棚

・特　集・

隣りは何を読む人ぞ。ちょいと本棚をのぞかせてもらいましょう。医博、教育家、政治家、社長　ETC。とくとご覧いただきましょう。

書くための本

戸田古方

本は大好きです。読むことも好きですが、どうやらツンドクの方がもっと好きらしいです。いつでも読める状態にしとかないと気になるので。一度買い損なうと臍を噛んでも追っつかないこの国の出版事情では見つけ次第に並べておきたくなるのです。

持っている本を数えたことはありませんが、羽衣の手広いうちにいる時には押入れ一杯と二つばかりの本棚につまっていました。羽衣から堺大浜へ宿替えする時、荷馬車一台には乗り切りませんでした。大浜のうちでは十畳程の洋間の窓までつぶして四方の壁に天井までとどく本棚をめぐらして、思った通りの書斎を造りましたが、戦争中、灯火管制でこの部屋にも落付けず、全部灰にしてしまいました。焼跡に来ると最下段の本が灰になったまま背文字が読めるじゃありませんか。路郎先生が千里を遠しとせず宇陀の山中へ本の車を自からひいて疎開された愛書のお心に芯から頭が下がりました。戦後、紙屑みたいなパンフレットを買うことから始めて、北摂の小さい家の、小さい部屋の一隅に天井までの本棚を又作るところまで来ました。外に本棚一つ、応接間の飾棚一段にぎっしり、飽和状態を少々オーバーしています。

歴史屋ですので、やはり歴史書が一番多いですが、最近は地理書や旅行記も大分殖えてきました。柳誌は川雑関係以外大したものもありません。美術の本若干。美術雑誌少々。歴史小説やその他の小説も此頃は時々。川柳とシナリオと絵が私の三つの目標だと古い川雑に書いた事がありますが、映画やテレビのシナリオ作法や研究ものも五六冊ではききません。それから可成りの冊数の宗教書。

私の本棚にないものはスポーツ書位い。正にガラクタ本棚です。

明治の生まれのせいか戦記もよく読みます。ノイローゼ防止の良薬です。

私、ほんとうは読むことより書くことの方が好きで、読むのは書くためです。何か見たいと思ったものが手近にないとキリキリします。ひところ、よく古本漁りをしましたが、その中にはくさったようなパンフレットを含めて随分変った本もありました。

買っておけば高くなって儲かるというようなつもりで手に入れた本は一冊もありません。

川柳塔の中から私の「本の句」を。

気が合うたのでだまってまけた古本屋

一冊二十円のところにあった戦争史

おのこありき小林一三伝を読む

参考書探すことには能たけて

戦争の本はスラスラ淀みなし

大医典かんじんのこと書いてなし

性の本こまめに辞書を引きながら

絵巻もの僕の先祖もいそうなり

君恩のあほらしなった天皇紀

お城下らしい本もならんで古本屋

新装拡張書籍売場は隅の隅

私の書架

小西無鬼

これから私の書架を皆さんに見て戴く訳ですが余りにも貧弱なのに、ツンドク方が多く手入れも出来ぬままチウ公に犯される心配もあります。

時々思い出して引出し頁を繰るんです。先ず路郎先生の「旅人」を最初に、私達、福寿草、句集三人、親ごころ子心、現代川柳名句集、川柳評釈、川柳辞典、俳風柳樽、英文西洋柳樽、川柳漫画全集、アリンス国時彙、川柳雑誌合本、及び合本以後の綴込み、位のもので外に貸して帰らないもの三、四冊で外には我が川雑篠山支部の句報「川柳ささ山」一号より一〇〇号まで（九月で一〇〇号）がガリ刷り乍ら支部設立以来の歴史を語り、前川左文字続いて遠山可住両君の今もたゆまざる奉仕の努力が輝いて居て愛着を禁じ得ませんし、私の貴重品の一つです。

川柳以外の余技的な図書として、短歌の関係、俳句の関係書若干、大東亜戦争史、昭和文学全集、手相の神秘、人相手相骨相、菜根潭講義、全集物では可成豪華なのも持って居ましたが戦時中に失いました。

現在公職の関係で法律書、参考書若干ありますが必要条文を見る程度で、他に趣味的なもの、宗教的なものの単本が三十冊程ありますが、買った頃を憶い出す位で余り引張り出す時もないようです。

ただ今も暇があればもっと読まなければと思ってるのは、手相、

人相等の本と田中智学著法華経の新見解等です（但し私は創価学会会員ではない）人に本を借りる事がきらいで、人の良い本を読んでいると自分のを買って蔵書にしたい欲を持って買うには買いますが、御多分に洩れずツンドク方が多いのは自分ながら困った者だと思って居ます。

併し他に奨めたい本は貸す事にしていますが、未だ数年来戻らない柳書の数冊は惜しいなと思います。

貸し本の誰がとじたか蚊の栞　無鬼

は戻って来た本の栞でした。

明治生まれの私の郷愁を誘うものに伊藤正徳著「帝国陸軍の最後」があります。私も男盛りを死線を越えた戦争に二回も応召し、最後は長崎の原爆を目のあたりに見たが少し後退していて難を免れたか今日迄原爆症状は無いようで、お酒は未だ量が減りません。これも神仏の加護だったと心から感謝しています。

それだけに余計戦争犠牲者が気の毒でならん訳です。

最近読んだ本で秋山ちえ子著「しあわせな子どものゆくすえ」は大変共鳴し、感心しています。戦後の青少年の姿を見てたまらない気持で青少年問題と取組んでいます。六十を目の前に時にはボーイスカウトを連れてキャンプをやったりして若い積りでいます。苦労が足りんか頭髪に白髪が殆んど無いのです。豆秋さんが生きておられたら少し譲り度い位です。

柳書漁り

河相すゝむ

昔先輩に「メンソレータム」なる愛称を頂戴したことがある。特技もないが一通り何にでも手を出すという意味らしい。本業の冶金学の方もそうだが、趣味の方でも、室の内外を問わず、見たりやったりの方である。従って読書の方も手当り次第種々雑多、広く浅くまるで見本棚みたいに、「麻雀全集」までおさまっている始末で、拙句の通り。

あれこれと本積みあげて満ち足りる

がらくたを一っぱいためて転居好き

役に立ったのか立たなかったのか、一寸目を通しただけで読まない本も、並べて眺めるだけで結構楽しんでいる。平素の置き場に、まして移転の時には困りながら、今は不要の本にもそれぞれに思い出、愛着があって、手離す気にもなれず、段々に押入れや棚に塵をかぶって積まれたままになってしまう。

小学生の頃、寺小屋育ちの厳格だった父にかくれて、布団の中に電灯を引き入れて、明日までに返さねばならぬ立川文庫の真田十勇士に夜を徹したこと。中学一年の時、半月程の病臥を幸いに父にねだった処、買って来てくれたのがトルストイの「青年」だったこと。夏目漱石のものだけは不思議に許してくれた父に、まさか「坊ちゃん」ならぬ「虞美人草」に胸をときめかしているとは思いもよらなかったろうこと等、今でもなつかしい思い出がある。高等学校時代の家を離れてからはその反動で、又同じ理科から文科へ転向した級友の影響もあって、むさぼるように文学書へと図書室にこもったりもした。当時は大正の末期の漸く自然主義が終ろうとした頃で、倉田百三や厨川白村が学生を風靡し、又飜訳小説が盛んに読まれていた頃である。トルストイ、ドストエーフスキー、ツルゲネーフ、ロマンローラン等の、あの新潮版の一連の飜訳全集はたまらない魅力だったもので、未だにわが本箱を飾っている。関東大震災後の今は二束三文になった円本時代、この円本も仮名遣いや、漢字制限で子供達には読めないものになり、場所を塞ぐだけになっている。

大東亜戦が始まって、読書の方はストップの形になってしまった。専門の技術書の方は会社の空襲で研究資料と共にすっかり失ったが幸いに家は助かったので、平凡社の大百科辞典28冊等は学校用に古本屋から二万円で買いに来たりしたものである。これもその後、新版の世界大百科事典が出て値が下った。新版の32冊と共に大きくわが家の幅を取っているが知識源として活躍、川柳用にも大いに役立っている。旧版の方は娘の嫁入りにお伴すべく予約済みである。

31年、入院が縁で、川柳を知ってからはわが本棚もがらりと変り、川柳関係の本がその主座を占めることになった。なぜもっと早く川柳を知らなかったかと悔みながら、目下も柳書柳誌漁りを続けているようなことである。

最初に手にした柳書は川柳雑誌であり、先生の「川柳とは何か」である。これ等、書店で求め得るものは稀で、大部分は予約又は限定出版でうっかりすれば機を失し勝ちである。図書館も未だ系統だった分類蒐集の段階ではなく、折角寄贈の個人句集も受け付けない状態で、バラバラの蔵書しかないのは、まことに残念である。そこで古本屋に頼って自分で集める他はなく、出張の余暇を九段下から神保町にかけての数十軒を虱つぶしに漁っても見るが、目指すものは仲々に得られない嘆きを繰り返している。それだけに集ったものは言い知れぬよろこびがあり、特に次のもの等は私にとって掲け替えのない大切なものとなっている。

◎川柳雑俳集（日本名著の26巻、武玉川収録柳樽はその不備を赤インクで補筆の古本ならではのものである）◎川柳集（大正2年国民文庫刊柳樽45篇、前句源流全文転載）◎誹風柳多留全集上中下三巻（一六七篇全部収録、七千五百円の高値に数ヵ月を神田の古本屋の飾窓とにら目っこの末意を決して求めたもの）◎川柳久良岐点（明治36年刊、神戸で偶然発見、川柳梗概は未だ機会に恵まれず）◎独習自在川柳入門（明治37年刊、25年刊の川柳作法指南があるが未見）◎川柳漫画全集全十冊（明和から大正に至る年代別句集、各冊に添附の月報の三面子、文象、雀郎、周魚等の寄稿には得難いものがある）◎昭和百人一句（宮尾しげおのカリカチュアーと共に柳人録として貴重、三篇があると聞くが未見）

柳誌に関しては古本屋でもまと

まったものは殆んど皆無、創刊号に至っては至難のわざ、◎川柳雑誌、◎ふあうすとのそれを入手出来たのは幸運と思っている。ふあうすと誌は一部欠本ではあるが、一巻から九巻まで各巻製本のものを本舞で偶然入手した。岐阜の柳書刊行会発行の◎やなぎ樽研究は大正14年5月創刊からの一〇五冊中僅か23冊ではあるが貴重品と思っている。

現在の川柳に関して、その歴史、理念と言ったもののまとまった単行本がなく、それ等については当時の先輩から教えられるか、個々の柳誌に載せられた断片的の所論によるより他に方法がない。又今日の川柳を知る上からもそのバックナンバーは貴重な参考書であるにもかかわらず、一部に死蔵のまま我々後続のものには知る機会もなく、又知ろうともしないのか、すでに論議され、又試みられた事柄を、いたずらに新らしい考えのもののように繰り返すの愚をしている面が多分にある。どうにかならないものかと常に案じることである。

此の八月に出版された河野春三氏の「現代川柳への理解」は革進的進歩的川柳の立場からの「現代川柳」への書ではあるが、その「川柳革新の歴史と展望」の項で、わが路郎師が日軍、半文銭氏と共に川柳革新の先陣として大きな業績を残しておられることを、又それ以後の戦前戦後の経過についても、実作を例挙して詳細に展開されている。我々は事新らしく川柳の文芸性詩性を口先だけで叫ぶ前に、先輩の巡った尊い苦難と情熱を、歴史を通してもっとしっかり身につけて、前進しなければならない。此の意味で「現代川柳への理解」は伝統、中庸、革新いずれの道を選ぶにしても、我々に大きな反省と理解を与えるものであり、熟読すべき近来の好著と思う。これが薫風子著の「有情」と共に目下の私の愛読書である。

読書に法則なし

足立春雄

私の本棚などは決して人様に自慢の出来る筈のものでもないし、どうして此のような順番が廻って来たのかも判らない位いのものである。それでも勤務先の病院の自分の部屋と書斎兼応接間、兼、兼の自宅の部屋とを合わせば結構四つの書架がある。とはいうものの大部分は親ゆずりのものを含めての医学書で、専門の臨床以外に趣味に近い酵素学や、ビタミンやホルモンに関した研究書と医学雑誌の類である。医学以外のもの、中には先ず辞書類を集めた棚がある。中学時代に使ったものも並んでいるが、その主力となっているのは世界百科事典である。次に川柳の聖書ともいうべき「旅人」を中心に川柳雑誌社の入手した限りの句集と単行本がある。その下は畑違いの日本文学全集も並んでいる。病院でのものは別として結構戦後の闇市を思い出させるような極めてまとまりのない書架と言える。

あるとき病院の会計検査か何かに来た役人が「先生は本を買え本を買えと言われますが、一体よくお読みになっているのですか、それにしては奇麗すぎます。我々の電話帳は真黒ですが……」と病院の書庫を歩き乍らつぶやいたと聞いている。これは勿論集めただけでも価値のある図書や図書室のあり方を知らない人の言葉ではあるが、この論法でいけば私の本棚でも極めて僅かの実験用の参考書と川柳の本と、その他は数える程のものしかこの検査官のお気に召すようなものはない。よく世の識者は精読と多読の長短について種々むずかしい論義を楽しんでおられるようであるが、本を読むのに原則的な法則などがあろう筈がないというのが私の信念である。堀江青年の太平洋があったからヨットを漕ぎ出したというのと、登山家の山があったから登ったというのとは全くの同意語であるが、読者も強いて言えば本があるから読むのだと言えないこともあるまい。今迄開け放していた窓をしめて、何処からともなく聞える虫の声を耳にしながら歯にしみ通るような二十世紀でも口にして、何気なく引きぬいた一冊の本は結構秋の夜長のレジャータイムの喜びを与えてくれる。

この為には乱読もまた楽しで、昔の知人にめぐり逢ったような楽しさもあるし、未知の世界に飛び込んだような驚きもある。何かの必要があって古い本を開いたとき亡父の引いたアンダー・ラインに出合ったり、訳語が小さく書き込まれているのを見たりすると草葉の蔭から叱咤されているような気もする。とにかく心暖まる一時をもつことが出来て、暫くは調べものも忘れて往時の追憶にふけることもある。

専門以外の本は中々読めないのが実情で、たまさかの発熱とか下痢で二、三日病院を休むとき位いにその機会がある。そんなときは文学全集のあれこれを引き出して読んでみるのであるが、多くは過去に一度よんだもので、改めて別の臭いや味わいを感じることが少なくない。読書のリバイバル調である。

忠兵衛が理解の出来ぬカミユの子
本閉じて子の声聞かん日曜日
常用漢字間違いかなとも思い
マスコミの新語を追って疲れ果て
一生を紙虫で終って学士院
啄木に見せたいような税がくる
百科事典子の質問はかいてなし
週刊誌で仕入れたくせによく喋り
立読みで済ませぬ本を包ませる
寝室の描写詳しい本が売れ

空き間のある本棚

国弘半休

六人家族の間では長男夫婦と孫が六畳と八畳を使って居り、短大一年生の末娘が四畳半を勉強部屋に使っているので、私の本棚は已むを得ず応接間に置かねばならないことになった。

コクヨ
便箋

薄雲

冨士野鞍馬

伊達綱宗が、高尾の後に通ったのは薄雲であった。その薄雲は三浦屋の抱えで、高尾の次位にいた太夫ともいわれているが、また姿海老屋の抱えともいわれ、川柳は、

三浦屋の裏は海老屋で返すなり　（万安七）

三浦より姿海老屋ははねる也　（タル二五）

余の客はいらぬと姿海老屋いひ　（タル八）

薄雲で海老で鯛を釣る気也　（〃五一）

と詠んでいる。

高尾は綱宗をふり通したが、薄雲は、従順になびいたのであった。その二人の対照をいささか嘲弄的に、狂作して、

ふりさうな名の薄雲はふらぬ也　（タル二一）

ふりつづく後に薄雲なびく也　（〃四八）

ふりつづく跡へ薄雲なびくなり　（〃七二）

薄雲になって晦日の月も見え　（〃六二）

錦木を薄雲ぢきに取入れる　（〃二二、三八）

薄雲の手ぎわにふれぬ大鳥毛　（タル八七）

薄雲は濡れるばかりでふらぬなり　（タル七五）

薄雲は義理にもなびく所コでなし　（筥二）

ふらずてらさず薄雲はいい名也　（タル一〇三）

薄雲で少しは晴れた御胸也　（〃四一）

うすぐもで少しは晴れるふった跡　（〃三八）

ふった跡薄雲が出て泣いて晴れ　（〃一一四）

薄雲は実に春情の物がたり　（〃一一〇）

なびいた薄雲をば請出さぬ也　（〃二二）

薄雲だから振らうかと初手思ひ　（玉柳）

などと詠まれている。

また綱宗は、高尾へ通った

酒
清
金露
灘・魚崎
大塚合名会社醸

昨年国鉄を退職して現住地を永住の地と定め、引越荷物をほどいたのであるが、その際国鉄関係の書籍は殆んど整理して倉庫に仕舞い現在あるものは、上段の辞書と参考書、中段の川柳関係、下段の隅には尺八の音譜全集物等で本棚の空間には髪剃の古歯を置き忘れたり、スタンプ台や印鑑を突込んだりしていて老妻から叱言を聞くことがある。

本棚は私以外には余り用のない存在で、子供にも孫にも嫁にも扱われていない。だから本棚の上に置いてある路郎先生から貰った張子の虎（実は陶器だが）もアイヌ人の彫った熊公も頗る安全な位置で来客の観賞をお待ちしてる訳である。

川柳作句上この本棚を開くことはしばしばあるが、その多くは辞書の字を索く場合のもので、川柳関係の書籍は私がかつて一読又は二読したものの整頓したものである。本来なら友人にも奨めて読ませてやりたいのだが、貸した本はなかなか帰って来ないのでよほど信用のおける場合でないと貸さないことにしている。川柳雑誌は昭和十三年以来ずーと一年毎に製本して別の文庫に仕舞っているが、これは私の原稿になったり、テーブルスピーチの話題になったりする。就中路郎先生の巻頭句や名句難句解説などは私の柳話の唯一の教材で、川柳雑誌の受売りをやって川柳人の気を吐くのも亦楽しいものである。

この外に鶴見祐輔、徳富蘇峯、松岡洋右の著書もないでもないが、これ等はみな私の青年時代をふりかえる役しか持たないようである。

本棚の川柳やってるなと聴かれ
本棚へちとくすぐったいものもおき

字引を読む

傍島静馬

いまはむかし、ニキビ華やかなりし頃には、もっぱら軟文学にこり固り、トルストイ、ドストエフスキー、シェクスピヤなど飜訳ものをはじめ、谷崎潤一郎、有島武郎から島田清次郎に至るまで、当時売出し作品の恋愛ものは片っ端から読み漁り、大いに若い血を燃やしたものだったが、昨今のように公認のガールフレンドなどがあったわけでなし、ひとりでやるせない思いをしていたものだ。また「国民文学全集」「世界美術全集」「浮世絵全集」など大正時代に次々発行された全集ものもだいぶん積んでいた。そのほかに弟が書いた経済原論、外国為替論、取引所論等々、それが私にはとても難解で中々読みこなせない本だったが、発行毎にデディケートしてくれたものが数冊、当時私の本棚にひときわ異彩を放っていたが、いまはそれもこれも一切戦災により焼失してしまった。惜しいこと

時には、伽羅の下駄をはいていたので、

御うわさもありんしたとうすくもいい　（タル二七）

薄雲の時にはただの御下駄なり　（笹二）

薄雲は又候下駄のもえツくひ　（傍初）

薄雲が座敷は伽羅で蚊をいぶし　（タル五一）

伽羅くべに来る薄雲が座敷の蚊　（〃七二）

と、こんどは下駄でなく、蚊いぶしに使っただろうと川柳はうがっている。

伊達綱宗は、陸奥守であったから、その領地内の、日本三景の一、松島に洒落て、

薄雲はいっそ松島見たうおす　（タル五三）

松島へうっすりとした雲なびき　（〃五二）

松島へ初手からなびく薄い雲　（〃一三六）

などと作られ、また、

薄雲は陸奥と名をかへたがり　（傍初）

薄雲はつぼの石文書き尽し　（タル一四四）

しのぶ摺り薄雲に又乱れそめ　（〃一四五）

と、領内多賀城の「つぼの石文」や名物「しのぶ摺り」などにかけて綱宗を利かせても詠まれている。

たやすくなびいたので、ハリのない太夫として、高尾に対比して、嘲笑の句も詠まれ、

うす雲は当世高尾は古風なり　（タル二四）

うすくもがせなかその頃ゆびだらけ　（〃二一）

さげ切の跡でぐふたらべへを買イ　（コリ三）

其時分ぐにや雲といふ太夫出来　（タル二五）

うすくもの生国京都だもしれず　（万天七）

等の句が見える。高尾は塩原生れ、薄雲は信州埴科郡鼠宿の産である。

もう夕にかけさうなものだと　薄雲　（タル三一）

薄雲を秤にかけて見たいもの　（〃四四）

高尾は体重と同量の小判で受け出されたので、右のような句も作られている。

薄雲まんぢうばっかりと割って喰ひ　（タル七二）

うすくもでもてたで江戸をぶっこわし　（万天七）

こうして、高尾から続いて薄雲へ通った放埒は、遂に万治三年（一六六〇）七月十八日、綱宗は逼塞の厳命を受けた。それから伊達騒動となったのである。

もう一人の薄雲太夫が川柳に詠まれている。これは猫を愛したので、その猫が薄雲の危急を救ったという話がある。元禄の三代薄雲のことである。

猫の様な傾城は薄雲なり　（笹四）

京町のやりての声で猫の真似　（武二）

薄雲のかむろマタタビくんなんし　（タル一三六）

鉄漿とまたたび京町の禿買い　（〃一四三）

をしたと思っている。だからいまの私の本棚は、言わば戦後派で内容がすっかり変わっている。その中には最近購入した国民百科事典全巻と言海、川柳雑誌昭和二十八年三月から現在までのもの、俳風柳多留の川柳集、初代川柳選句集、旅人、福寿草、新川柳鑑賞など川柳に関するものばかりだ。だから余暇には自然これらの本を手にすることが多いわけである。

私は近頃作句の場合、必らず字引（言海）を見ることにしている。一見ほんものと見紛うような、うまいあて字を書く人を時々見受けるが、私にはとてもそんな器用な真似は出来ないので、作句の際は必ず字引を横に置き、あやしいと思えば一応たしかめた上、あて字や誤字を書かないように努めている。万一字引に得心のいかぬ場合は、いさぎよく仮名書きに代えるようにしている。また課題等に疑義を生じた場合も、字引を見ることによって、本来の意義以外更にいろいろ異った解釈のあることなどを知って、作句上大いに参考になるからである。時たま川柳にもってこいの語句、言葉などを発見して、思わず会心の笑みを洩らすことさえある。

字引を見ることは何んでもないようだが、これには相当な根気と努力が要る。私もはじめの頃は面倒臭くて、全然見ようともしなかったが、いまではもう、字引無しでは安心して句が作れないほど習慣づいてしまった。

〃句を作りつつ字義を覚える〃これは川柳をすることによって得た貴重な習慣であり、自分ながらたしかに良い傾向だと信じている。恐らく私が川柳を捨てない限り、この習慣は今後いつまでも続くことと思う。いまはまだ本棚のアクセサリー的存在である国民百科事典も、追いおい字引のように、大いに川柳に役立てたいつもりでいる。

何かの本に関する句は無いものかと、旧作を探して見たが意外に少なかった。

大掃除あるじの書架にふれさせず

ベストセラー古本屋にも儲けさせ

立読みの少年がいてよくはやり

おとなりの美人に見せて読む車内

成功談いっぺん書いてみたくなり

句評リレー

工藤甲吉　青森市
木山遠二　岡山県
長野文庫　今治市
西川晃　大阪市

うんうんと世辞をうるさく聞くお医者

むじな

甲吉—少し血圧が上がりこのところ医者通いをしているのを幸いに診察でなく観察を細かくしてみた。その結果病状を聞いてうんうん、世辞を聞いてうんうんというのが医者であることが分かって苦笑を禁じ得なかったが、ただ後者の世辞に対するうんうんも、前者の病状に対するうんうんとはやはり真剣味の点ではっきり違うことも分かった。つまり後者のうんうんは聞いているのか聞いていないのか——といったもので、恐らくは聞いていない方が強かったようである。ところでこの句によりお世辞とは医者にまでいうものなり——ということを改めて教えられたが、しかし「治りたい」「治してもらいたい」という病人の心情、あるいは金が思うようにならない病人の心情など思えば思うほどもっともなものがあるようだ。医者よりも、あわれな病人の姿が見える。

遠二—お世辞によって匙加減に変わりもあるまいが、そこは弱い者の心理で仕方があるまい。見えすいたお世辞を聞かされて、お医者がうるさがるのも当然でしょう。ところがこの句で医者は「うんうんと」世辞に対しいちいち返事をしています。うるさい顔等せず微笑ぐらいしているでしょう。それは上五によって感じられる事ですそこへもって来て「うるさく聞くお医者」とありますが、この「うるさく」を何か他の言葉で包んで隠して、対象と表現が一致するようにしたら何うでしょう。

文庫—座五の「お医者」で息が抜け腰砕けの感がある。大体お世辞は誰だって誰からか聞くものであり、特に権威ある者がよく聞くとは言えないが、常識で考えると広義の何等かの生殺与奪の権を握っている者が一番多くうるさいお世辞をうけるものである。その意味では医者以上の者が沢山あると思うから「お医者」が不適当というのである。それではその名は誰かと言うと私の考えでは「ボス」である。或いは官吏、公吏、守衛などに当て嵌る。更に「権力者の子供、赤ん坊」などよくお世辞を聞き且つうるさく聞く立場にあると思う、但しこれが実感句であれば止むを得ないが単に医者を選んだものとすればバランスが崩れている句と言える。

晃—座五の「お医者」の代わりに「ボス」がきたのでは愈々此の句は平凡になってしまうのではないでしょうか。又遠二氏が言われる「うんうん」と「うるさく」は、医者がうるさく思いながらも、余儀なく「うんうん」と返事をしているので、対象と表現の不一致とは言えないと思います。但しこの「うんうん」という上五は、此の句の場合もっと適切な詞を考える心要があるでしょう。着眼は決して悪くないけれど、素材をそのままに投げ出してしまった感じで水準以上の作品とは言えぬと思います。永らく病床にあるとどんな剛毅な男でも、傍で見て見苦しい程弱気になるものです。死の予感に脅えて、医者に媚びねばならぬ病人の弱さに重点をおくともっと深味のある作品になったのではないでしょうか。

甲吉—私はこの句をあくまでも実感の句と受け取っているが、それにしてもなんだか少し物足りなさを感じさせられるのである。たとえば作者は、せっかくの世辞をうるさく聞いている医者を見ていったい何を感じたのか。この句にはそれがなく、ただ単に描写に終わっていて強く迫るものがないのが遺憾だ。なお私はこの場合、医者の描写ももちろん悪いとは言わないが、むしろ医者よりも患者をとらえて句にしてもらいたかったと思う。

遠二—世辞が過ぎると、うるさいものである。相手になっていて馬鹿らしいものである。「世辞」の二字は既にこの意味を含んでいるようにさえ思われる。それなのに医者は「うんうん」といちいち頷いているのだ。其処がこの句の狙いではないのか。「うるさく」と説明するよりは、もすこし此の句としての必要な言葉に置き替えられるべきと思う。含蓄ということも考えたい。上五の邪魔をしている言葉とも言える。

文庫—実感句という条件と背景があって押し通る句は作者が感じるほど読者は感しないのである。実感句だって読者の心に触れるものが必要ではあるまいか。この句にしても単に作者の実感が独走しているとしか受取れない。

晃—一般に川柳には、対象を突放して客観的に描写した句が多いが、此の句の場合も主観を殺して、飽くまでも客観的に状景を促えたのでしょう。甲吉氏の評にある「単なる描写」に終らない為には、今少し機微を穿つ表現でなければならぬと考えます。

誘惑を待つ溜息が聞えてき

鵜汀

甲吉—失望、心配などの時に長くつく息、といき、長息、大息が溜息だと辞典は書いているが誘惑を待つなどという経験がない私には果たしてそんなときどんな溜息が出るものやらよく分からないのである。ともかくそのときの非常な複雑な心理と言ったものがそうさせるのだろうか、度胸のない私にはむしろ溜息でなく心臓の鼓動が平常よりも烈しい、どきどきする。つまり動悸の方が聞こえて来て仕様がないのである。このさい動悸は自分自身のもので隣室の溜息といったようなものではありません。

遠二—仰言る通りです「動悸が聞こえる」とならば、実際は聞こえるか何うかは別としてすぐ納得が行くのですが、溜息だから一寸難しくなる。「誘惑を待つ」とは異常な心理であり、「自分自身の溜息が聞こえて来る」とは、異常な表現です。大概溜息というものは、意識してするものであり、何

処からか聞こえて来るという筋のものではないでしょう。本人は今普通の頭ではないようです。

文庫—色々考えた末こんなことを考えてみた。ある時彼女から電話がかかって来た。電話の内容は「誘惑して欲しい」という彼女の誘惑である。勿論この誘惑は聊かもエロ的なお下劣な意味ではないので身の上相談か喫茶かダンスか映画か兎に角男性からの発言を待つという風な感情である。その場合「あなたの方から誘いをかけて貰わねば出られないのよ」というような溜息を感じた。聞こえた、との意味に解したのである。勿論見当違いだとは思うのだが——それにしてもこの句何か一と工夫の表現が欲しい。

晃—男女二人が向いあって坐っている。場所は映画館でも喫茶店でも或いは野外であってもいい。二人ともすでに可なりの人生経験を積んだらしい年令である。女は人妻か?とにかく恋愛経験はもっている。容易に限界を越そうとしない男の冷静さが、女心をさらに掻き立てて、彼女は切ない溜息をそっともらす。或いは此の溜息は男心をそそるゼスチュアーかも知れない。女のそんな気持を充分知っていながら男の理性がわずかに情熱を制している。然しこれから先はどうなるか分らない。全く息詰る一瞬である。と此のように、此の句を解することはできぬでしょうか。私は、少し古めかしい感じがするけれど、大人の恋の複雑な心裡の一端を表現したものとして、佳句だと思います。

甲吉—誘惑を待っているのだが、なかなか誘惑をしてくれないので女が溜息をしている——という晃氏の解釈でなるほどと一応納得させられたが、それにしてもなんとむずかしい句であることか。『誘惑を待って溜息する女』ではあまりだろうが、ともかく私はもっと分かり易くする心要があるのではないかと思う。たとえ晃氏の言われる如く「複雑な心理」を詠んだものとしても句は複雑にしたくないものである。ただしあまりに単純では困るが……。

遠二—語句の省略に聊か無理がありはしないだろうか。仮りに「誘惑を待つらし」とか「誘惑を待つか」というふうにあれば、文庫氏のように、或いは晃氏のように、たとえ素人でもらくに持って行けるのだが……。私は本人の溜息を本人が聞くのかなと思い、下五の「聞こえてき」には一寸まごついた。小さい枠へ入れるのだから、省略は大いにしたいが、余り難解になっても困る。

文庫—十人が十様に解釈する句は佳い句とは言えない。この句も遠二氏の最後の言葉「省略大いに結構だが、難解は困る」との説についてゆく。

晃—甲吉氏の『誘惑を待って溜息する女』では此の句の半分を表現しただけで、その溜息を聞いている男の方が、此の句の主体なのだと私は思う。先入観念を交えずに、句そのものを素直に鑑賞すると、それ程理解に苦しむ作品ではない。ただ此の句の場合〃聞こえてき〃という表現がありふれた方法なので、句に新鮮さがないように感じられるのは惜しいと思う。

（担当—真鍋一瓢）

續 川柳書架 (25)

荒木京之助句集

（白石維想楼編）

★巻頭に井上剣花坊、野口雨情、安倍季雄、三氏の序ならびに自序があり、次に編者の序がある。

★次に荒木京之助吟、中山晋平曲の「ありたけの」と「巡業の」の二曲が発表され、次に序吟及び奉迎鶴翔、諒闇の春が掲げられてから、句集。巻末に、新年言志、忠徳公と光丘翁、関東大震災、鮮満の旅、温泉めぐり、追悼の句を載せてある。

★昭和二年三月廿五日発行。菊半截、一〇二頁、定価七十五銭。発行所東京市外大井町五三八五柳樽寺川柳会出版部。

★著者は山形県の素封家荒木彦輔氏で今は世に亡き柳人。

詩川柳考

（高鷲亜鈍著）

★巻首に著者の「序のことば」がある。

★目次の概要を挙げると、——三作家（奥村丹路、須崎豆秋、橋本緑雨）と本質論、詩川柳に関する覚書、月と矢、現代柳界の穴、庶民とか民衆。

★昭和三十六年二月廿七日発行、B6版二四五頁、価三八〇円。発行所、大阪市住吉区万代西五丁目二五番地川柳雑誌社。

★著者は川柳のエッセイスト。

川柳 二千六百年史

（戸田孤蓬著）

★巻首に、京都帝国大学経済学部教授、本庄栄治郎経博の「八紘一宇」の書が写真版で掲載され、次いで麻生路郎の序と著者の自序がある。

★目次概要を挙げると——神代時代、大和時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、吉野時代、室町時代、安土桃山時代、徳川時代、明治時代、大正時代、昭和時代。

★尠に著者と同期であった宮本又次経博が筆をとられている。

★昭和十五年十一月十日発行。B6版、一四二頁。定価九十銭。発行所、堺市出島海岸通リ二丁目一八二不朽洞。

★著者は路郎門の逸材で川柳雑誌社の編集部員。

川柳文学雑稿

（岸本水府著）

★本書は戦時体制反古版とあって、紙の不自由な時代のもの。巻頭著者の序にこれは私の「川柳をつくる上の雑談集」であります。云々とある。

★目次の概要を挙げると、真川柳道の建設、句談、放談、偶感、雑話、追憶。

★昭和十五年十二月十九日発行。四六版古反紙一七四頁。定価七十八銭。発行所大阪市住吉区浜口東二丁目四、番傘川柳社。

★著者水府氏の思いつき出版として珍らしいもの。みな曽て番傘に掲載されたものが収められてある。

大阪市民文化祭

第十四回 市民川柳大会

・会場　毎日新聞大阪本社講堂・

講演する北川春巣医博（黛風子氏撮影）

菊かおる十月十三日、大阪市民文化祭第十四回川柳大会が毎日新聞大阪本社講堂で華々しく開催された。例年の日曜日システムを土曜日にしたのも新しい試みであった。

昨年と同じように、ことしの文化祭川柳大会へ〝川柳文学社〟と〝川柳雑誌社〟だけが市民文化祭に参加した。市としては各吟社へ選者を依頼したようだが、所風吟社への義理立てか、申しあわせか知らないが、非協力吟社の方々からはいい結果が得られなかった。

司会の西田柳宏子氏が快調な弁舌にのせて第十四回川柳大会の幕をあける。

開会の辞を竹岡屯坊氏が力強くのべ、挨拶には大阪市教育委員会三木社会教育課長が登壇された。市民文化のため川柳大会が第十四回を迎えたことに対し、市としてのよろこびをのべられた。

つづいて関西短詩文学連盟の麻生路郎理事長も挨拶に立たれ、市民川柳大会である以上初心者の人がもっと多く参加して、川柳人全部が幹事となって、市長賞をしろうとの人にわたすようにまで、盛り上げていかないと市民川柳大会の意義がないと力説された。

講演は〝病気と川柳〟と題して、医学博士北川春巣氏が医家としての立場からもろもろの病気を、また柳人としての立場からそれぞれの句を示され、病気を詠んだ川柳をもって感銘深く語られた。（本誌14P参照）

余興としてことしは麻生アート氏指導のCMC児童音楽サークルの特別出演である。

曲目はダカン作曲の「郭公」である。演奏者は可愛いお嬢さんが二人。ISTVIは山中美佐枝さん（石切小学校六年生）INDVIは杉崎千代子さん（東陽中学校二年生）である。美しいメロディが、作句に疲かれた頭を休めてくれるのも、音楽ならではのことである。――ダカンが（一六九六――一七七二）ー死ぬ二年前（一七七〇）ベートベンが生まれた――麻生アート氏談ーそうである。

時間の都合で一曲だけではあったが、小菊二輪のかなでる「郭公」に、思わず頭をふって拍子をあわす柳人もあった。

さて、待望の川柳大会の本番である。ここで準備のための小憩があった。きょうは十五年ぶりの優勝で大阪ファンの血をわかせた阪神タイガースが、東映フライヤーズと日本一をきめる選手権試合が甲子園で行われているのである。若い人の心がここに集中されていたことを知っている堀口塊人氏が、披講のすんだあと、

「毎日新聞の特別ニュースを申し上げます。阪神、東映戦は6対5で阪神が勝ちました」

と、あざやかな戦況報告は正にタイムリーヒットだった。

兼題「信用」　堀口塊人選

信用のない人間へ貸す聖書　西川　安静

兼題「桟橋」　中島生々庵選

桟橋が紙一筋の義理で済み　八木摩天郎

兼題「出世」　石井黙平選

出世せよ夢をはらんだこいのぼり　福富　隆子

兼題「ラッシュアワー」　川村好郎選

ラッシュアワーふっとホームに菊薫る　岸川　漣

兼題「駅前」　山下清祿選

駅前で母はもう一度いいきかせ　山川　阿茶

兼題「妻」　若本多久志選

夫いる夜の安らぎに針を持つ　木村　草々

このように市長賞を得た六秀句

株式会社 丸越
電気器具
瓦斯器具
雑貨
洋装
靴鞄品
家具
呉服
婦人服店
紳士服店
ノ吉野島生
ア住平都蒲堺
大阪市阿倍野区阿倍野筋三丁目六〇 電話戎〔641〕3957・3958
大阪市住吉区長狭町三五 電話住吉〔671〕4985・4986
大阪市東住吉区平野新町三丁目一 電話東住吉〔791〕2110 9814
大阪市都島区都島本通三丁目104 電話 921—7459
大阪市城東区鴨生町四丁目二八 電話大阪〔231〕1445
堺市熊野町東一丁一 電話0722・銅2局3587・1600
良い安い買よい　十カ月払
月賦のデパート

が発表されたのである。正にふくいくたる菊のかおりそのままの名句ぞろいである。

十月は各地でも盛大に川柳文化祭が催されることであろう。これらの秀句は市民の顔でもあるのだ。川柳のレベルを評価されるこの市民川柳大会でよりよい佳句を生むことは、一人でも多く参加することにあると思う。愛する郷土のためにも、来年こそは全吟社が一堂に集まってほしいものだ。

閉会の辞も西田柳宏子氏の一人二役となり、若さにモノをいわせた大活躍はご苦労だった。秋の陽がまだビル街にある五時、ここに大阪市民文化祭第十四回川柳大会はめでたくおわる。

大会拾いばなし

「甲子園はどういうことになっていますか」

と、堀口塊人氏もさすがに阪神タイガースの勝敗がお気になるとみえ、トランジスターラジオを持っている人に、そっとその戦況をきいておられた。

小山、村山で勝敗のヤマは見えたというお顔色をよみとったのである。

会場後方のテーブルに茶湯や湯のみがおいてある。中島生々庵氏が披講の前に、のどをうるおしにこられたが、どの湯のみもみんな使用後のものだった。おそらくこの柳人医博は手にされないだろうと思っていたが、

――柳人みな兄弟。という氏の信念そのままに、平気で湯のみを手にされた。

○

野球選手にも大会男というのがある。ビッグゲームになると異常なまでにファイトをもやすようだが、ここに大会女があるとすればまず、山川阿茶さんだ。この第十四回大会でも特選で堂々市長賞を獲得されたのである。麻生葭乃女史ご自慢の友の会きってのファイターでもあるのだが、この人の熱心さには頭がさがる。

○

ことしの受賞者に若い人が選ばれなかったようである。大半は六十才以上の方だった。これはどうやら〝題〟そのものにあったのではないかと考えさせられた。〝ラッシュアワー〟以外は老人向きだったような印象を受けたのだがどうだろうか。

○

石井黙平八十翁が「出世」を披講されるとき、ことしもこの大会に非協力吟社のあったことを遺憾きわまりないと痛憤された。柳界のこの長老の叫びは、川柳永遠の平和の叫びでもあるのだ。

○

二十数人の女性群が会場右側に陣取っていた。どうやら川柳人ではないらしく、なにか文化団体のように見受けられたが、このような人たちの参加は本大会の新しい収獲だったと思う。

○

昭和十二年に、

――我が家と思え大阪市

という愛市標語があった。市を愛するわれわれ川柳人もこの句を心としたいものである。市を愛し市の文化にいささかでも尽したい至誠が、きょうの出席となったことは、意義深いものがあったようである。

○

伊達堰子、児島与呂志、西田柳宏子の三氏は九時すぎには会場へ来ていた。場内の整備はこの三氏によってなされたのである。よほど川柳が好きでないと出来ないことだ。

○

本大会の句集は若木多久志氏責任のもとに鋭意編集中である。一日も早くお届けすることをお約束する。

（不二田一三夫）

出席者―路郎、堰子、与呂志、柳宏子、一三夫、文秋、安静、九文銭、白柳、喜久堂、黙平、虹二、六竜子、好郎、塊人、多久志、実坊、静馬、薫風子、文蝶、正子、阿茶、八郎、久雄、一三三、一栄、清子、直三洞、雄水、蛙水、小松園、屯坊、久子、玄武洞、清蔭、万平、眉水、舟遊、隆史、あいき、笛生、鶴声、判志、清風、弘村、葉平、旋鳳、郁三、専翁、兼次郎、一男、静林庵、粉洲、井平、アート、美佐枝、千代子、摩天郎、連木、春巣、和郎、真寿夫、秀畝子、生々庵、十七、蘇堂、宗二、雅巣、富久一、初甫、操子、きさ子、洵三、ふもと、紫香、富喜枝、泰、庸佑、明果、松月、美佐、礫、閑山、生蕚、句念坊、谷本、友子、吉太郎、都詩子、藤吉、昭、大丘子、緑人、美恵子、静波、静幸、ひさ子、信二、いわを、東天紅、酔升、正俊、朝之助、草々、春己、正一、三司、豊悦、トメ子、〆女、水京、繁雄、楽天、すゝむ、修、紫真、進之助、季貴、美栄子、嘉子、フサ子、安宏、あけみ、史朗、一作、ソサ、幸次、茂、ヒロ、相良部、一美、栄三、松坊、鈴久、万葉、柳志、文楽、天里、芳流、貞子、幸代、幸江、保子、三男、郁子、たけし、紫木、花代、麗子、寿美枝、竜仙、月乃、晴巳、聖司、宏子、葭乃

★

入門講座

研究題「みぞ」

清水白柳

課題吟の作句というものは楽なようで非常にむつかしい、余程真剣に課題と取組まないと上辷りの句、つまり題を説明した句になり易いものである。

—半々に地所分けあって溝が出来　K

—お隣りと出し合い溝に土管埋め　S

—溝一つ作るに利害もめている　S

—境界の溝で今尚もめ続け　S

—団地との境へ溝が溢れ揉め　隆史

—みぞを境に何代もいがみ合い　美舟

「半々に」の句には二ヲ通りの解訳が出来るようである。地所の境に溝をこしらえたという説明的なことと、地所を分けあった時にもめたので精神的な溝が出来たということと両方に考えられるが、どちらにしてもそれだけのことでしかない。「お隣りと」の句には土管を埋めて少しでも広く土地を使いたいという気持を詠んでいるのだが事柄が平凡過ぎたので成功していない。「溝一つ」の句も作意は判るのだが、利害もめているという利害が無駄な字句である。利害が相反すればこそ、もめるのだから利害は考え直す必要があると思う。「境界の」の句は最後の「みぞを境に」の句のように何代もといった表現にするか或いは別の観点から語句を考えられる方がいいのではないかと思った。「団地」の句は新らしく出来た団地をとらえているのがよかったと思うが境へのへは境の・と断定した方がよいのではないかと思った。

—うららかさ町内総出の溝ざらえ　弘朗

—モデル地区溝の掃除も大わらわ　雄水

—一つみぞにつながり隣組気が合い　K

—みぞ掃除口々に褒める父代理　八九寸

前の二句はそれぞれの出来事を描写しているが単なるスケッチをしただけに終っている。「一つみぞ」の句は隣組という字句と共に想も古いと言わねばならない。最後の句は苦しい表現である。これをやわらかく句にすれば、〃みぞ掃除みんなで褒める代理の子〃となるかも知れない。

—みぞの泥上げて標識赤い布　K

—みぞにつまったおとなりの菜ッ葉屑　S

—溝尻の因果はごみを揚げさされ　生薑

標識の句は見たことそのままの句で句主が何を感じたのかこの句からは汲みとることが出来ない、赤い布をぶらさげたことからそこに働いている人達の動きを感じさせることは無理なようである。「菜ッ葉屑」の句は余りに淡々とした句でみぞにつまったことに対しての腹立たしさが出ていない。それじゃどうしろというのだと言われると「溝尻の」句を見てほしいと言いたい。溝尻は何軒かの前を流れて来て下水の本管へつながる会所のあるところを言ったので、因果という語句にそのいきどおりとあきらめを感じさせて面白い句になっている。

—宵月にみぞへとび込む千鳥足　B

—溝づたいひやひやさせる千鳥足　I

—溝に足っっこみ虎のもがきよう　S

—千鳥足溝はまたいだつもりだが　秋月

最初の句は暗夜でなく宵月にという所に川柳味を感じられたのでしょうが満月であっても三日月であってもいいということになると宵月が決定的な語とは言えない。上五文字に動かないものを考えてほしい。満月にみぞへとび込む千鳥足〃或は〃くらやみにみぞへ……〃等々何んでも上五文字につくようではいい句とは言えない。ひやひやさせる句には句主がひやひやして見ている感じは判るのだがそれだけに終っているのが惜しい。次の句の虎は酔っぱらいがもがいているのを句にしたのだが面白い句にしようという作者の意志が現われすぎていていや味を感じさせるのが失敗だと言える。〃溝をまたいだつもり〃の句にはユーモアがある。こうした作句も好もしいと思う。最後の句は酔眼でなくてもいいと思う面白い表現で成功している句と言える。

—ステッキの撫で切り溝でやめにする　隆史

佳い着想で句が生きている。郊外での心の動きをうまく描写してあって嬉しい。私の旧作に〃草を薙ぐ杖とはなりぬ道遠く〃というのがあるが私の句よりもステッキの句の方は川柳味が深いと思う。

—みぞ濁し濁しシジミ取りのぼる　八九寸

—蛙の子溝で手が出来足が出来　勝子

—町有で蚊のわく溝も埋められず　生薑

—農薬へ泥鰌ッ子溝を追われがち　一鶴

—雨ポツリポツリ溝から小蟹が出　静水

—どぶ板をめくれば赤い蟹が逃げ　静観堂

どの句も動物をもって句を構成されていてそれぞれの句に面白さがある〃蛙の子〃の句は軽妙なタッチで描かれていて成功している句であり〃泥鰌ッ子〃の句には批判があると思う。

—行水の捨てて匂うかどぶの溝　K

—二三丁匂わし風呂屋湯を落し　和三郎

—風呂水の香りなまめく小溝端　S

圭井堂氏の句に〃下水から風呂屋に近い湯気が立ち〃という句がある、〃行水の〃句からは夏の哀愁を感じさせられるが浅いと思う。〃二三丁〃の句には都会の周辺地で下水管の敷かれていないところを感じさせられたが若い人達には通じないかも知れない、〃風呂水の〃句には〃なまめく〃と作者が感じているがこれは共感を呼ばないと思う、香りというのも少しオーバーな気がする。

—みぞ板を踏んで我が家の安堵感　K

—ここから先き俺の家だぞ溝またぎ　S

—溝に気を付けてと客を送り出し　杏花

—格安の家で下水に苦労する　弘村

初めの句はだれもが思うことを詠んでいるので平凡さを免れることは出来ない、次の句も同じことが言えるのである、こうした句境は特別な句語か余程すぐれた表現

力を持っていなければ佳い句にはならないということである、〃客を送り出し〃の句はしっかりとしたポイントがあって佳句であると思う、最後の句は溝という文字が入っていないが粗雑な建売住宅の一面をうがっていて面白いと思った。

—わだち溝になって開拓地へつづき　弘道

—自家用車溝を跨いで野宿する　和三郎

二句共素晴らしい句である、ダンプの通るぬかるみが乾いて溝のようになっているのを諷刺してあるのも佳いし、青空駐車を皮肉っているのも愉快である。

—へたくそなテニスで球が溝に飛び　K

—子の野球ボールは溝へ逆転勝　隆史

へたくそというのは少し作りすぎていると思う、それを別な描写にするとずっと句がよくなるのである、野球の方の句の逆転勝とは大げさすぎるのではないかとも思ったが、子供の野球であればこれでいいかも知れない。

溝の水飲みたいテリヤの紐を引き　ひ呂し

犬を運動に連れて出ている主人の神経質な潔癖さをよく読んでいると思った。

—みぞをはる電気カンナは音を立て　S

—電動のみぞ切り寝てる子を起し　句念坊

此の頃の建築場ではどこでも電気鉋やミゾ切りを使っているが大へん大きな音を立てるのが気になる、使ってる方も気兼ねしているのだが消音装置が充分でないので仕方がない、初めの句は只〃音を立て〃といっただけで説明に過ぎない、後の句は寝てる子を起しとやや作者の意図がうかがえるが、その腹立たしさを表現する句語がほしかったと思う。

—DDT襖の溝にまき間借　弘道

厳密に言えば溝でなく襖の隙間なのだろうと思うがそこまで言っては句が作れない、襖の溝でそれが表現されているのだからこれでいいのかと思う。

—敷居の溝減って古さを誇る寺　句楽坊

—立付けへ大工を呼べば溝の減り　ひ呂し

—溝にもう油をさせと戸がきしみ　雄水

洋式の家であれば殆んど開き戸（ドア）になっているのだが和式の建物には溝の敷居が多い、わけてもお寺などになると戸が大きいので重いから溝の減り方もはげしいわけである、初めの句はそれを詠んでいるが説明の域を脱していない、次の句には川柳味があるといえる、いくら大工でも溝の減った敷居では取替えるより他に手はない、そこに面白さがある、後の句は溝に油をさすというのは少し変である、油を溝へ流すと戸の辷りはよくなるが黒くなり汚れ易い、木蠟が一番良いのだが普通のローソクでも塗るとよく辷る、油をさすのはレールの戸車である。

—子の電車障子の溝をレールとし　弘道

着想の広さを感じさせられる句である。

—溝石に年代を知る史跡かな　S

—淡水貝平安宮の庭の溝　S

どちらの句にも作者が顔を出していないということである。作者が感じられた事柄はよく判っているのだがそれだけの報告では川柳味がないと言える句になってしまったようである。

—田植水百姓たがいに尖り合い　清風

—旱天の小溝死守する農夫の眼　専翁

どの句も農家の事柄を詠んでいるのだが、それだけに終っている、深刻な事態だけにもっと別の観点に立って句にまとめる方がよいと思われた。

—みぞ埋めて今日はうれしい箸を取り　清風

この句は田植の水が充分にあるので溝を埋めるのではなく溝を堰き止めることなのだろうと思うがこれを溝埋めるというのかも知れない、そしてやれやれと言った気分を詠んだものと思う。

—こぼれ生えいたわる様に溝をあげ　静水

—一握りの米が稔った溝の隅　秋月

—溝に迄稻を植えてる残苗　勝子

作者の温い心がどの句にも感じられて気持ちのよい句である。

—みぞ跳びに副えた慈愛の手も疲れ　長始

—溝一つ飛べない年で廻り道　K

初めの句は苦しい表現である、句意は大へん佳いのだが固くなりすぎたようでもっと楽な句語を考えられると佳い句になると思う。

次の句の着想はよいのだが飛べない年でいう句語が失敗していると思われたと大へん惜しい句だからもう一度分解して仕立て直すことを考えてほしい。

—すみませんが言葉にならず溝が出来　弘村

—選挙のことから親戚に溝が出来　弘朗

—遺産あるばっかりに溝が出来　周甫

—事金にふれてそれから溝が出来　酔升

—利子つけて返してからの溝が出来　ふみ子

おしゃべりが過ぎて隣家と溝が出来　句楽坊

—焼香の順序からまた溝が出来　ふみ子

人間的な心の溝の句である、どの句も下五文字に溝が出来と結んでいるがそれぞれに面白さを持っている、中でも〃事金にふれて〃〃利子つけて〃〃焼香の順序〃の句はするどいうがちを持っていて佳いと思われた。

—我田引水隣り同士に深い溝　繁太郎

—隣りとの溝を子供が埋めてくれ　秋月

初めの句は我田引水がよくうがっていて佳い句になっている、次の句も佳いと思う。子供が出来てからの和やかな近所交際をよく諷刺している。

—産声に浅からぬみぞ跳び越えて　八郎

このみぞは心のみぞである、何かの事情で別居しているのであろうが、娘に子供が出来たのでとんで行ったという句意であろう、浅からぬみぞという句語が生きている。

—溝とれて明るいムード部屋に満つ　一鶴

前の句のつづきのような句で面白いと思った、すっきりした仕立方の句もよいものである。

—凡人の個性がみぞを深めてみ　T

心理描写もいいが斯う抽象的な表現にすると形だけの句になってしまうおそれがある、深さということは作者が深刻がっていることではない、読んで心を打つ句でなければ深い句とは言えないのである、読者の心を打つには具体的な事柄を句にした方がよいと思う。

—両人識らず親だけのみぞ　八郎

この句は十四字で詠まれている。短句と言ってこうした型式も川柳にはあるのだが中々むつかしい。十七字でも句にまとめにくいのに十四字に省略するのはその上にむつかしいものである。武玉川という古句集の中には十四字の句が多くあって有名である、〃踊るときには袖が魂〃〃寒の牡丹のたましいで咲く〃などという句がのっている、路郎先生の〃二階を降りてどこへ行く身ぞ〃も有名な句である、両人識らずの句は中々よく詠まれていて深いものを持っている、試みとして詠まれるのはよいが深入りしないように心掛けてはしいと思う。

次回　研究題「自信」

十一月二十日

発表　三十八年一月号の予定

宛先　大阪府南河内郡美原町丹上四〇四清水白柳宛

一路集

皺

市場没食子選

顔に皺よせて姑は又小言　雪美
人生の落伍者という皺の数　祥月
スカートの皺を気にして十八九　松太朗
鏡台で皺を曲げたり伸したり　清人
顔の皺もう気にならぬ年となり　勝子
争えぬ顔の小皺も更年期　繁太郎
縦皺をよせて小言の改まる　与太郎
皺と皺明治を語る同窓会　楢雄
仲裁は皺に免じて顔を立て　千翁
何か気に召さぬ羅漢の眉の皺　光郎
温顔に皺ふえました母の歳　ろ亭
コンパクト生きねばならぬ皺を消し　蛙水
顔の皺パフの方から遠慮する　ふみ子
皺よせとあって月給も月を越し　隆史
財布から選り出し皺の札払い　句念坊
年の方が承知をしない顔の皺　季費
皺のないお札もあっという間に出　素身郎
ショッキング鏡に皺を見つけたり　愛鳩
勤続十年オールドミスにある小皺　鶴声
皺だらけの顔百才という笑顔　孝風
同じ歳皺のないのをうらやまれ　静水
コップ酒笑えば泣いてるような顔　光道
履歴書は皺もつかずに返って来　和三郎
ニュールック着せて目尻に皺を寄せ　宗太郎
しわくちゃの風呂敷助かりますと借り　同
古文書の皺をのしつつ古語辞典　秋月
空の旅地球の皺を見て帰り　どんたく
しわくちゃになっても一万円という威厳　圭水
中年の皺が皺がとコマーシャル　専翁
サヨナラホームラン皺くちゃにされ　八郎
ほり深い顔が絵になるインタビュー　代仕男
金一封軽いが皺のないおさつ　生萱
まねき猫おさつの皺を横目で見　恵二朗
輝くや人間文化財の皺　同
佳
皺苦茶を「うなじの波」と歌に詠み　八九寸
おふくろに年には別の皺があり　木魚
美容食とっても顔の皺がふえ　十九平
皺なんか頓着しない浮気をし　黒天子
洗濯した札はガラスに張って干し　涼人
人
頬べたに敷布の皺をつけて起き　圭井堂
地
漫画家の皺一本を見逃がさず　恵二朗
天
顔の皺人間国宝らしく見え　十九平

外出

長野文庫選

外出へ念押している忘れもの　静波
外出へ化粧長びく妻を待ち　楢雄
外出をする口実に会を入れ　孝風
急患が外出先へ電話する　旭峯
PTA外出勝ちの妻となり　古心
おそく共帰えると常套手段とり　生萱
脱線をする気の財布しらべて出　弘朗
他人の子連れて外出気が疲れ　好女
家に居ようと思えば悪友誘いに来　雄水
外出の留守へ珍客訪れる　季費
奥さまの外出送って昼寝する　恵二朗
外出へ旅館のどてらよく似合い　市郎
別々に外出をする歳になり　明朗
外出が好き奥さんの若作り　祥月
無断外出バス待つ列に夜迫り　光道
外出の会ってはならぬ人と会い　圭水
外出の母へ泣き声聞きわけず　和三郎
外出が三面鏡へ念を押し　光一
外出の言い訳すらすら嘘並べ　与太郎
外出の気ままに出来る頃停年　紀太呂
外出の時間が切れた待ち呆け　宗太郎
外出をとがめる母も出好きなり　圭井堂
病院へ行く外出と近所見ず　藤波
一寸そこまで行先は言わず妻　初雨
外出をしていることにして昼寝　旋鳳
ふところ手行く当てもない下駄をはき　光郎
折角の訪問子供でらちあかず　ろ亭

すしの口拭うて外出から帰り　蛙　水
外出のついでに廻る地下　売　場　淀　月
外出へこれ見よがしの自家用車　雄　々
外出のつど言い訳に苦労をし　たけお
外出ということにして断る気　庸　佑
喰えばいいようにしていて妻は留守　大八州
外出が多くなる婦人会会長　一　鶴
外出へ鏡の前の小一時間　晃　康
パチンコへネオンが誘う宿浴衣　隆　史
外出の小遣い貰う歳となり　雄　声
外出と言えば子供を連れさされ　同
外出へ持つか持たぬか思案傘　句念坊
外出をよくしなさると団地の目　十九平
女房の出好きへ子等の遊び癖　石　峰
日曜の外出に子供預けられ　杏　花
外出の用意に手間どる妻ともめ　ひ呂し
外出に門限があり酔いきれず　代仕男

佳

期することあって外出髭を剃り　涼　人
パチンコ屋と言わず外出しています　八　郎
外出のどちら向いても金が要り　秋　月
もう子供ではない外出へうるさすぎ　静　水
外出へあの手この手のテクニック　どんたく

人

外出の出来ぬ窓から青い空　宗　義

地

女子寮の外出四五人束になり　恵二朗

天

仲たがい外出先が一つ減り　愛　鳩

軸

お隣りの噂外出先で聞き

失恋

菊田いさむ選

失恋で僕にも出来たメロドラマ　千　翁
慰める人も失恋の経験者　光　一
失恋を人にも言えず独身主義　旋　鳳
失恋が致死量に足らぬカルモチン　光　郎
失恋のやけ酒屋台がもて余まし　十九平
失恋にラジオも歌う君恋し　王　石
失恋をしたらしツイスト踊らない　恵二朗
忘れよと失恋経験者は無慈悲　生　薑
失恋の罪を衣裳にしてしまい　好　女
失恋をしてから金を貯め始め　孝　風
失恋で妙なものよと玉の輿　鶴　声
百万のファンを失恋させて嫁き　愛　鳩
結局は失恋になる恋はかどらず　季　賛
失恋をうらやましがる友と呑み　杏　花
失恋の姉弟に茶化されるひ呂し　
口止めをして失恋を打明ける　宗　義
失恋へデートの借金だけ残り　素身郎
失恋がわが青春を棒に振り　清　心
失恋も自慢で話す多情者　古　心
失恋が動機となって高利貸　八　郎
失恋の痛手天理のハッピ着る　ふみ子
失恋と受難映画の骨子なり　隆　文
失恋のその上祝詞のべさされ　静　水
失恋へベーゼの甘さだけ残り　祥　月
失恋にやつれ和服をいつも着る　光　道
失恋も知らず悲しいオールドミス　圭　水
失恋へ笑って聞かす経験談　保　夫
あくびしているのに失恋気がつかず　どんたく
身投げする程の失恋してみたし　宗太郎
初恋に敗れ四十の世をすねる　勝　子
失恋の痛手か乙女死を選び　庸　佑
失恋に同情をして恋になり　蛙　水
失恋と知っても無利子の金を貸し　弘　村
失恋も試練というてる回答欄　雄　声
失恋と同時にパトロン取りそこね　句念坊
失恋の痛手無口な人となり　雪　美
失恋は互いに清いまま別かれ　祥　月
道ならぬ恋に破れた少女A　たけお
その日から余白失恋した日記　大八州
失恋という事にして嫁き遅れ　秀　峰
失恋の眼に万才が阿呆らしい　涼　人
病気よりいいと失恋いたわられ　雄　々
店休むマダム失恋した噂　柳瓢子
酔うたびに失恋の愚痴聞かされる　和　郎
失恋の自殺の齢をおしまれる　雄　々
失恋の相手を聞けば妻子あり　専　翁
自殺の動機失恋らしい遺書　一　鶴
失恋をしたか化粧にむらが出来　淀　月
三度目の失恋同情してくれず　十九平
失恋の酒酔い切れぬバーの隅　代仕男
失恋の心も知らず猫がじゃれ　恵二朗
失恋はタイプの音も不調なり　淀　月
ガス自殺恋の恨みを書き綴り　古　心
失恋が阿蘇の噴煙見て帰えり　博　友
失恋の相手の視線さけそこね　野迷路
妹に恋を譲ってから無口　和三郎
失恋のそれから通勤道を変え　初　甫
失恋とわかった遺書のはし書き　藤　波
女教師の失恋ピアノ打ち続け　紀太呂
相手の名言えば失恋嘘にされ　和　郎

人

片思いだった失恋とは知らず　豊　年

地

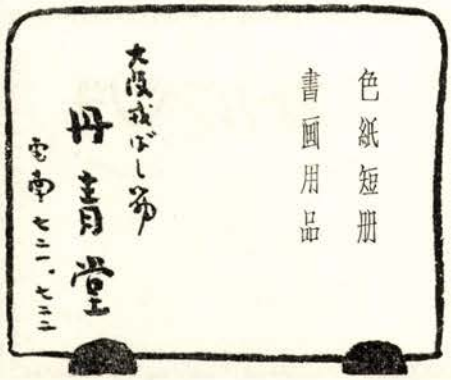
失恋を売り物にして夜の蝶　圭井堂

天

失恋の女は芸に生きていた　瑞　歩

軸

外人に失恋世間は冷たすぎ



柳界展望

句会

▼本社十一月句会（武部香林・若菜追悼）は七日（水）午後六時から千日前電停前自安寺で開催する。香林・若菜夫妻の生前を偲び、冥福を祈って柳縁につながる柳人多数のご出席をお願いする。▲南区医師会文化部杏林川柳会句会（大阪市）は十月十六日（火）午後七時半から三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼南海電鉄川柳句会（大阪市）は十月十八日（木）午後六時から難波親和クラブで開催。コクヨ川柳句会（大阪市）は十月廿六日（金）午後六時から黒田国光堂で開催。▼大阪逓信病院句会は十月二十日（土）午後一時から五階会議室で開催。▼第十一回東北川柳大会は十月七日（日）午前十時から河北新報社別館ホールで開催。▼大阪市民文化祭第十四回川柳大会は十月十三日（土）午後二時から毎日新聞大阪本社講堂で開催。以上路郎主幹出席。▲川雑備前支部九月例会は二十二日横山一声居で開催。▼岡鉄倶楽部文化部主催秋季川柳大会は十月十三日（土）岡鉄クラブで開催。▼富田林市民川柳大会は十一月五日（月）午後一時から同市西方寺で開催。▼堺市文化祭参加市民川柳の会は十月二十四日（水）午後六時から堺市新在家町善宗寺で開催。▼第十三回西宮市民文化祭参加川柳大会は十一月十一日（日）午後二時半から西宮市今津の市教育文化会館二階で開催、兼題は不況・神社・湖・晴れる・止まる、席題三題、当日発表、投句は各題別紙三句を明記の上十一月十日迄に西宮市鞍掛町二五松本一平宛、投句料五十円。▼大南陽川柳大会は十月十四日（日）午前七時から山口県南陽町富田西小学校で開催。▼岸和田市文化祭参加きしせん川柳大会は十一月十一日（日）開催。▼読売新聞主催の川柳世相展が十月六日から十日までの五日間大阪心斉橋そごうギャラリーで開催、最終日に大阪まつり参加大阪祭川柳大会があった。▼函館市民文化祭協賛川柳大会は十一月十八日（日）午後六時から千歳会館で開催、兼題風・雨・雪・朝・晩。▼寅年生社人祝賀協賛誌上大句会が名古屋川柳社主催で開催。▼川柳きやり五百号記念誌上句会募集は昭和三十七年十二月末日着便で兼題、大きい・運勢・腕・国旗・海、発表は明年四月号、五百号誌上、投句は東京都豊島区高田本町二ノ一四五九川柳きやり吟社五百号記念句会部宛。▼三重川柳会秋季川柳大会は十月七日（日）午後零時半から伊勢市岡本町中日新聞伊勢支局二階ホールで開催。▼第十三回市川市文化祭川柳大会は十一月四日（日）正午市川市民館で開催。▼川雑倉吉支部、米子支部合同川柳大山句会は十月二十一日（日）午前十一時から大山国立公園倉吉営林署職員大山宿泊所で開催。▼尼崎市文芸祭川柳大会は十月二十八日（日）正午から尼崎市立公民館で開催。▼小林不退人句碑除幕記念句会（青森県）が十一月午後一時から黒石温泉郷、中野神社社務所で開催される由、除幕式は十一時から同所で挙行、句は「あきらめて歩けば月も歩きだし」

消息

▼路郎主幹は十月五日午前八時大阪駅発の第一富士で東上、同日午後、高須啞三味氏、阿部佐保蘭氏の案内で慈恵大東京病院の北病棟一階一二一号室に川上三太郎氏を見舞われた。六日夜は東北川柳大会の前夜祭、七日は同大会で講演及び選をされ翌朝離仙、八日は再び東京滞在九日夜十時第二富士で無事帰阪された。▼阿部佐保蘭氏（東京都）は九月二十三日の初代川柳忌には、自宅で宮尾しげを画伯描く初代川柳画像をかけ、初代川柳を偲ばれた。▼高須啞三味氏（東京都）から、「ご懸念の川上三太郎君も今しばらくで退院するらしいですが、例のアゴのコブを取りましたので、アクメ会の「路郎氏歓迎の夕」で写した写真がコブの写っている最後の写真となったわけです」と。▼米沢暁明氏（大洲市）は九月十日札幌着、全国連合小学校長会終了後四日間の北海道観光を楽しまれ、「霧晴れて歓声の湧く屈斜路湖」の句信を寄せられた。▼木村水洞氏（大阪市）は十月十日に京都郵政研修所へ入所され一ヵ月間、郵便外務主事主任の業務講習を受けられることとなった。▼中村九呂平氏（下関市）は九月十九日、夫人同伴出雲大社に不服やらお願いやらを申し上げに参詣、日御碕灯台を見学、園山旅館で一献傾けた後、一畑薬師へ向われた。「妻は礼私も不服で額きぬ」▼水谷竹荘氏（大阪市）は九月十五日高血圧症と心臓病のため大阪逓信病院第二内科南四階十三号室に入院された。▼河相すゝむ氏（西宮市）は十月六日七日八日の広島大学での鉄鋼協会、金属学会共催の秋期講演会に出席のため広島へ。路郎先生も仙台への車中かと思いをはせながらの一人旅です。十年振りの広島です。街を南北に両断した幅百米の防火道路が完成して人間の知恵の限りなさを思わされました。「人間の知恵まざまざと原爆地」▼奥谷弘朗氏（倉吉市）は勤務先の倉吉営林署の署長が川柳に深い理解を持っておられるので、十月の打吹句会は、大山の紅葉の一番美しい二十一日の日曜日に国立公園大山の営林署宿泊所で、米子、鳥取、松江の川柳人も招き大々的に句会を開催する予定を立てておられる。▼杉本一鶴氏（貝塚市）は秋の好時候到来で日々身体の調子を取り戻され、最近聖書通信講座をも受けられて目の前が明るくなった思いだとのこと。▼川村好郎氏（大阪府）は十月十四日丸紅飯田川柳会の伊藤泉睦、竹内一世、村田瓢太、稲葉星斗、村岡大樹、美幸の諸氏らと淡輪に吟行、淡の輪苑にて清遊された。「雨もよし淡路四国も模糊として」▼工藤甲吉氏（青森市）は路郎主幹と東京で再会、十月十一日朝帰青されたところ、三時間の後に東京で男の初孫誕生、「おじいちゃんもう鯉のぼり買う話」と手ばなしの喜びようを寄信された。▼安岡珊枝郎氏（大阪市）は夫人同伴で三朝温泉に遊ばれ、約十日間を病後の静養湯治に過ごし十月初旬の山陰の風物を楽しまれた。▼西辻竹青氏（奈良県）は十月十一日赤穂に旅し、潮光園で内海の眺めを飽かず眺望、「治水もうこんな昔に出来ていた」▼西尾栞氏

啞三味居にて——（10月5日）

啞三味・佐保蘭両君の案内で、慈恵大東京病院へ川上三太郎君を見舞った。元気だったが面会謝絶で療養につとめられていた。病気と病院の経験を持たぬそうだから、阿呆になることと、付添、看護婦、医者の言うことを厳守するようにと要点のみを話し、疲れてはと約廿分で辞し、啞三味居に引返えしてくつろいだ。路郎生

（写真説明—啞三味・路郎・佐保蘭）

（八尾市）は十月十三日、東北方面へ出張。車窓より、「一の木戸、二の木戸めきて稲架襖」▼大木笛我氏（東京都）は武蔵庵（高須啞三味邸）で在京中の路郎主幹、工藤甲吉氏らと歓談されたが非常に印象深かったと寄信された。▼川上雅鼓氏（東京都）から、「父三太郎をお見舞下さいましてありがとう存じました。父も大喜びでございました。昨九日あたりから熱も下り食事も以前よりおいしくいただける様になり安心しております。」とのお便りに接した。▼八木摩天郎氏（堺市）は十月十四日午後二時から堺市九間町佐次町内会長邸での、おふくろ教室で川柳から見た世代世相について柳話をされた。▼長谷川鮮山氏（名古屋市）は九月二十三日東山公園一粒社で開催の川柳忌句会に出席、閉会後茶席で小宴を開き初秋の風光を賞でられた。▼阿部美也子さん（横浜市）は阿部佐保蘭氏の令妹であるが、この程、川柳誌「路」の編集を担当されることになった。▼河合卯生木氏（金沢）が十月二十日午後来社されたが生憎主幹が午前は今橋クラブの懇親パーティへ出席、午後一時からは大阪逓信病院の句会へ出席されていたので会えずに帰郷されたのは遺憾であった。

柳　誌

▼国鉄川柳四十六号、第六回大会特集が昭和三十七年八月二十日発行された。発行所は全国鉄川柳人連盟、発行人伊藤勢火、編集人植村客遊子。▼近県川柳大会五周年特集号たけはらが昭和三十七年九月竹原川柳会から発行。▼正木十千棒夫妻喜寿金婚祝賀川柳大会特集号が昭和三十七年六月三十日川柳江戸川吟社から発行された。

慶　弔

▼中村九呂平氏（下関市）の二女泰子さんは河野祐輔氏との縁談とのい、十月十三日下関市労働会館福寿殿で華燭の典を挙げられた。お慶び申上げる。▼高須啞三味氏（東京都）の三男亜人氏は十月四日良縁を得て結婚。お祝い申上げる。▼西出一栄さん（大阪市）の二男祥次氏は駒井由子さんと結婚、十月二十七日生玉御殿で挙式された。新婦は川雑玉造支部に属し川柳をたしなまれる才媛。お慶び申上げる。▼木村水洞氏（大阪市）の令嬢紀久子さんは十月七日黒田誠二氏と結婚された。お慶び申上げる。▼山内静水氏（竹原市）の母堂が十月七日一時五十分死去、年七十八。葬儀は翌八日に執行された。謹悼。▼武部香林・若菜夫妻（岡山市）は昨秋以来失踪中、本年九月下旬両氏の白骨死体が徳島県池田町箸蔵山で発見された。香林氏六十五才、若菜さん六十三才、永年夫妻とも不朽洞会員として川柳に精進されていたが失踪前に夫妻とも会員を辞された。香林氏は曽て同会副理事長を勤められ同会功労者の一人だった。

正　誤

▼前号十二頁下段二行目、「初会客名前は荒木又右衛門」雉子郎とあるは、句主花酔の誤りに付訂正。又、十三頁下段六行目は mer—chant と訂正。▼同三十七頁下段十三行目茅誠吉氏とあるは誠司の誤りに付訂正。▲本誌四百二十号二十七頁三段、二十六行目大正十三年とあるは昭和十三年の誤り、同三十行目、三十九年前とあるは二十四年前の誤りに付きそれぞれ訂正。

不朽洞の人々

小川造花店主　小川恒雄氏

商売のコツは辞書では引けなんだ

（恒　明）

なんの経験もなく、見様見真似で始めた商売。
コツがなかなかのみ込めず、やっとこさとぼんくらながら生きている。しかし、努力はやがて、実を結ぶだろうと、作句にも、こんな積りでいる。

不朽洞会から

★文化月です。いい句の上にもいい句を創るように会員諸氏のご精進を祈って居ります。（多）

★新会員紹介　—十月

▼藤岡友子（富田林市）正▼岩田美代（同）正▼松本吉太郎（同）正▼置田ふじ（同）正。以上摩天郎氏推薦▼徳永雅美氏（大阪市）は家事の都合で九月限り退会された。

飛・燕・往・來

★河野春三氏より（大阪市）
—路郎記

★お便りを深謝します。お元気でご活躍のこと慶賀にたえません。拙著に対しおほめに預り恐縮至極、各方面から過分の賛辞をいただきましたが、誰よりも貴下からおほめ願ったことは嬉しく存じました。勿論、出来上って見るとまだまだいいたい事の半分もつくしておらぬし、川柳の歴史のところは、何分資料らしいものも持たぬ現在ではどうしようもない焦燥を感じるのみです。此の点古い来歴と体験と資料をお持ちの貴下が、正統な沿革史をお書き下さったら柳界を稗益するものが出来るものと痛切に思います。お忙しかったら、誰かに口述筆記させてでも是非まとめて下さい。日車や半文銭の詳細も貴下を措いて書ける人がないと信じます。私、近頃健康を害して静養中ですが、そのうち恢復しましたら機会を得て是非拝眉の栄を得たく存じています。ご自愛専一に祈ります。　匂々

生かされて生く

川村好郎

川柳は趣味というだけでなく、生活に潤いを与えるということだけでなく、人の心のあらゆる動きを教えてくれ、生活の種々相、人生を広く深く無限に掘り下げることを教えてくれ、それを求めてゆく所に川柳の良さがあると思う。

今回楠高薫風子氏の句集「有情」が出版された。私等のような老朽の齢でなく、かびの生えた川柳でなく、流石若さと新しい感覚を以て作句せられていることに感歎し、こんな世相があつたのか、そんな人生観もあるのかと驚いている。私たちの見る女は実に陳腐な昔なりの一面しか描いてないが、薫風子さんによって更にちがった新しい女の一面を教えて頂いて私は喜んで「有情」を愛読している。

先日或る句会で台風という題を出した。其の時或る方が

台風よ慈雨微風はいつわりか

という句を出された。勿論没の句であるが同じ雨、風でもそよそよと吹く優しい風、植物を育てる慈雨もあれば、植物どころか家も畠も吹き飛ばし流して仕舞う暴風雨にもなる。またその台風にも

台風にモデル住宅から浸り　さだ子

と人の力、才能の弱さを詠んだ句もあれば

人間の強さも台風に教えられ　好郎

という一面もたしかにあり、台風による人間の弱さも強さも偽りのない真実の姿であると思う。

私たちは他人、社会の恩恵を蒙って生活していることは否むわけにはゆかぬが、また他人、社会のためにどんなに悩まされ、迷惑していることであろう。

逆に私等の日々の悩み、苦しみ、争いの殆んどが親のため妻子のために繰り返されていることがどんなに多いことであろう。だがその親がある事、妻子が居ることによって如何に恵まれ、力付けられ、豊かな生活を送っているかも知れないのである。

この明暗清濁はどれも否定することが出来ないありのままの姿であり、その中に実は我々は生かされていることを知り、且つその中を如何に生かされてゆくべきかと努力し求めてゆくのが私たちの人生ではなかろうか。

皆さんには御存じないが、私はこの体に一つの秘密があるのです。それは私の右脇腹に大きなはくろがあることである。始めは極く小さいものであったが、だんだん大きくなって今では十円硬貨大の真黒な実にグロテスクな恰好をしてぶら下っている。これは私の妻しか知らない。若し私に恋人があって、もうこの齢では鐘や太鼓で探してもそんな物好きな女の人はいないが、万々一あったとしても、このほくろを見たならば、慄然として姿を消すであろうというしろ物である。しかも両足の表には大きな魚の目が出来ている。これは妻以外誰も知らない、また見せてはならない。私はこのほくろ魚の目によって教えられることは、人を決して見ただけで想像して、うらやんだり、幸せだとあこがれてはならんということである。他人に知られては困る秘密や悩み不幸はかくしているということである。他人の家を訪れても余程親しい仲でない限り、汚れた所は隠し、座蒲団の破れは裏返して、「さあどうぞ」と出すのが世の中だということである。

私はこのほくろ、魚の目は私の体の汚点であり邪魔ものであり、悲劇である。幸いなことに平常は少しも痛まず、有ることさえ忘れている。しかし疲れた時は思わず私の手はこの横腹のほくろの上に行く。更に疲労の度が加わると、ジクジク痛みを覚え、魚の目がうずくのである。ハハン大分疲れているなと早く床に就き休養することにしている。私に取っては健康のバロメーターである。私は切り取りもせず、我が体の汚点であるが大切にぶらさげている。

苦悩、逆境もどう受取り、取組んでゆくかということである。

去る九月廿日、川雑あべの句会に会場である松江梅里宅へ出席した。その帰り出席していられた吉田圭井堂氏が、自家用車が迎いに来ているから一緒に乗って下さいと勧められた。圭井堂さんは浜寺、私は高師浜で同じ方角なので、お言葉に甘えて乗せて貰った。岸の里のあたりまで行くと突然圭井堂さんが、

「ああ家内に土産をと思って買って来たバッテラ鮓を梅里さんとこへ忘れて来た」と言って早速梅里の家へ逆戻りすることを運転手に命じられた。私はその時、もう十時も過ぎているし、折角ここまで帰って来たのだから如何に愛妻家とは言え、バッテラぐらいで戻らなくてもよいのにと内心不服であった。しかし圭井堂さんの自家用車であるそんな気儘は言えない。その途でやはり六十前後になる偉そうなことを言っても物忘れをする。私もようするがお互いに気を付けんと齢は争えんと、半ば圭井堂さんに注意するように話した。やがて梅里宅へ戻り、運転手さんにバッテラを貰ってくるように車内から圭井堂さんは命じた。しばらくして「これですか」と貰って来た。そして運転手さんが

「もう一つ小さい黒皮の鞄が残っていてこれも忘れられたのとちがいますかと言っていられます」と言う。

ハッとして気がつくと私の鞄である。暑い晩であったので洋服の上衣を手にさげて、梅里宅を出て来たので鞄を置き忘れて仕舞うたのである。梅里の家だから別に差支えはないが、まあようこそ圭井堂さんがバッテラを忘れて下さって、まあよくも引返して下さったことだ。人ごとでない自分こそ忘れっぽいのも度を越している。脳のどこかが抜けているのだとはずかしく思った。

同じ九月の廿五日夜、川柳句会の打合せに生々庵先生の宅へ寄り合った。その帰り、南海浜寺駅から電車に乗ろうとプラットホームで待っていると、ホームのベンチに洋服の上衣が忘れてある。手で持つとジャラジャラ銭の音がする。この晩も暑かったので多分酒に酔うたか電車に乗る時に忘れていった人のものにちがいない。とすぐ駅へ届けた。私は決してその人を軽べつもしないし面倒くさいとも思わなかった。

足らぬものの寄り合いである。そこをお互いに補い、助け、助けられてゆくのである。同情も、親切も感謝も実意もここから湧いてくるので赤い羽根運動もこの長短共にある人間のありのままの姿を自覚することを基盤として生み出されてくるのである。

川柳によって、もっともっと人生のすべての清らかさ醜さも喜び悲しさも発見してゆこう、そして作句することによってより深め、更にその喜怒哀楽、明暗清濁の中に生かされていることを悟り、生きてゆくことに努力しよう。

第百四十回

大萬川柳

兼題「息抜き」　入選発表

選者　麻生路郎先生
投句総数　五百四十三句
入選　五十一句

社長留守言わず語らず息を抜く　愛媛　暁明
息抜きに帰った里の大掃除　京都　句楽坊
息抜きもせず儲かるか儲かるか　大阪　野迷路
みんな寝てほっとしている子沢山　大阪　あいき
午後三時息抜き族で混む喫茶　神戸　どんたく
息抜きをしろと社長に見舞われる　羽曳野　与太郎
嫁がせて息抜くひまもない月賦　石川　光郎
息抜いたとこを師匠は容赦せず　大阪　生々庵
乗客の唄で一と息つくガイド　倉敷　方大
ケチケチと貯めて息抜きまだ知らず　大阪　恒明
息抜きにPTAへ着飾って　笠岡　二路
息抜きへ天も味方をしたか雨　堺　圭水
パチンコで息抜きをするおじゅっさん　大阪　晃
部課長の順で息抜く旅費を出し　笠岡　桃里
百姓の息抜きになる慈雨が降り　笠岡　忠三
息抜きも出来ず五人の子に追われ　芦屋　一ン十
落選して息抜きですと言うものの　堺　狂二
息抜きは熱海と決めた途中下車　奈良　凡茶
本日休診医者は姿も見せぬなり　笠岡　遠二
息抜きに来い来い孫も連れて来い　笠岡　真奇
息抜きに誰憚からぬ深呼吸　堺　圭井堂
息抜きの首相を望遠レンズ追う　岡山　十九年
片腕にされて息抜くひまもなし　西宮　牧人
息抜きに来たゴルフでも儲けとり　大阪　春巣
息抜きが過ぎてぼんやり二三日　児島　恵二朗
息抜きに来たら一算たのまれる　大阪　柳志
囲炉の息抜社長もそばを食い　石川　宗太郎
唄止んで妓息抜きするトイレ
先生の息抜き自習という手あり　富田林　東雲梗
息抜きに酒豪は窓を少しあけ
へっついの前で息抜きしてる妻　岡山　東岸
息も抜き骨も休めに嫁の里
たまさかの息抜き電話が追っかける　岡山　藤波
息抜きと言わず議員の視察団
白状をする気へ一本喫わしたり　大阪　清人
ニコヨンの息抜き日蔭の紙将棋
息抜きに来た妾宅に客があり　大阪　阿茶
外遊と言う息抜きのある首相
御堂筋へ出てプラカード風を入れ　大阪　桜里
住込んで息抜き風呂にいる間だけ
息抜きに判事ルカ伝ひろい読む
相場師の息抜き将棋盤はさむ　三島郡　清生
息抜きの競馬で眠れぬほどに負け
息抜きへ紙の紅葉をくぐらされ
息抜きの別荘にもう記者は待ち　岸和田　きさ子
三味おいて妓おんなの顔をする
息抜きに時計のネジを巻いてみる
すり切れてしまうと悪友誘いに来　大阪　水客
息抜きにまわっ来ていとパスポート　堺　圭井堂

人　地　天

息抜きに平は小使室へ来る　笠岡　遠二
息抜きの仲居は下戸へ来て座り　大阪　柳志

昭和三十七年度（十月現在）

大万川柳ベストテン

一	**柳志**	二〇、〇	大阪
二	**梅里**	一八、〇	大阪
三	**十九平**	一八、〇	岡山
四	**藤波**	一七、五	岡山
五	**静馬**	一七、〇	神戸
六	**晃**	一五、五	大阪
十	**方大**	一五、〇	倉敷
八	**圭水**	一四、〇	堺
九	**きさ子**	一三、〇	岸和田
一〇	**清人**	一二、五	大阪
一一	圭井堂	一二、五	堺
一二	遠二	一二、〇	笠岡
一三	水客	一一、〇	大阪
一四	恒明	一一、〇	大阪
一五	清生	一〇、五	三島郡
一六	狂二	一〇、五	堺
一七	生々庵	一〇、〇	大阪
一八	恵二朗	九、五	児島
一九	良	九、五	大阪
二〇	文秋	九、〇	大阪
二一	素郎	八、五	堺
二二	阿茶	八、〇	大阪
二三	小松園	八、〇	大阪
二四	牧人	七、〇	神戸
二五	一三夫	七、〇	大阪
二六	東岸	七、〇	岡山
二七	宗太郎	六、五	石川
二八	桃里	六、〇	笠岡
二九	好郎	五、五	泉北
三〇	二路	五、五	笠岡

次の兼題「**弱点**」五句以内

〆切**十一月十日**

十二月の予告　五句以内

兼題「尾行（びこう）」

〆切十二月十日

投句先　大阪市阿倍野区松崎町三ノ十　大万川柳会

★〆切が十日になりました。今月は乗り遅れがありご注意を。——梅里

現代柳人録

(167) 小谷源氏

（一）小谷源治（こたにげんじ）（二）小谷源氏（こたにげんじ）（三）不艶馱・酸源・暁雨路・（四）東京都江戸川区上一色町七二（五）明治40年8月19日（六）東京都中央区京橋八丁堀岡崎町一ノ三（七）自動車修理販売（八）東京（六五七）三二一二（九）**孝行を必ずすると怖がらせ**（一〇）古典舞踊、落語（一一）無（一二）大正十三年一月

(168) 河村瑞川

（一）河村長治（かわむらちょうじ）（二）河村瑞川（かわむらずいせん）（三）——（四）大阪市南区内安堂寺町二丁目六九（五）明治26年6月15日（六）福井県三方郡三方町相田（七）医師（八）〔七六一〕二二二五（九）——（一〇）画、読書、旅行、生花、茶（一一）有（一二）不詳

いのちある句を創れ

花地物語

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

本社 十月句会（大阪市）

10月7日 午後6時
会場 ―― 千日前自安寺

爽秋十月本社句会は、橘高薫風子氏の句集「有情」出版祝賀とあって、会場は秋晴れの空を見るように、ここちよい雰囲気につつまれる。まず生々庵副主幹が、旅行ご不在の路郎主幹にかわって「有情」発刊を祝福されまた東京の塚越迷亭氏と高須啞三味氏から「有情」出版へ祝電をいただいたことに対し満場拍手をもって謝辞を申し上げた。

川村好郎氏は「生かされて生く」と題して柳話をされ、ユーモアの中に氏独自の人生感をのべられた。（本誌参照）

席題は「有情」から〃紫〃〃ベスト・セラー〃〃椅子〃という題をとって、第二、第三の「有情」出でよ、と祝賀と激励の友情がいっぱいだった。

今月の不朽洞賞発表にさきだって、生々庵副主幹から悲しいご報告があった。武部香林、若菜ご夫妻の死である。

高崎雄声氏が十月の不朽洞賞杯を獲得されて九時閉会。（F）

出席者 葭乃、八郎、圭井堂、専翁、繁士、瑞歩、狂二、一舟、行人、柳宏子、文蝶、梅柿、薫風子、旅風、奈良子、柳志、静馬、古方、生々庵、一三夫、梅志、好郎、進之助、東天紅、白柳、默平、雄声、文秋、玲人、水客、施鳳、尚史、井平、いわを、阿茶、句楽坊、有子、満潮、舟遊、三窓、みさ子、庸佑、与呂志、小松園、良、夢紅、季賛、栞、恒明、亜鈍、宏子

兼題「後輩」 中島生々庵選

後輩の女の始末つけてやる 一ン十
一年のことで先輩後輩とどんたく
定年が近く後輩へさんをつけ 和三郎
後輩にベルで呼ばれて立たされる 八九寸
後輩が校長になりちと慌わて 雄声
後輩が背中を見せて抜いてゆく 旅風
後輩の総理者にされている 静馬
後輩に介抱させてる梯子酒 与呂志
後輩の涙をいたわる縄のれん 与呂志
後輩が先輩の知らぬ夜も知り 専翁
後輩のくせに一升いける口 栞
後輩がいいにくそうにいうほんと 古方
後輩の娘に職安で世話になり 柳志
後輩の踏台になるよい教授 阿茶
後輩の無芸大食たのもしく 水客
たじたじとなり後輩の顔をみる 梅志
後輩に大物がいる気のあせり 一三夫
べんちゃらはきらい後輩左遷され 文蝶
殴り込むコツも後輩が継いでくれ 良
同じ学校にいただけで後輩とふれ歩き 夢紅
池田君あれは私の後輩や 狂二
大学入試兄が後輩となっている 繁士
腰投げに決めて後輩はめられる 旋鳳
後輩の意見を聞いて筆を入れ 小松園
ステッキの似合う後輩連れている 水客
葱ばかり食べず後輩肉を食え 三窓
後輩が来て二度落第したがばれ 良
後輩とわかってからは虫が好き 旅風
頼りない男と後輩までみぬき 恒明
後輩の前でさんざん絞ぼられる 圭井堂
後輩が恐縮してるイロハ順 柳志
後輩の仁義はのめぬ酌も受け 生々庵

兼題「乗り越し」 戸田古方選

乗り越しをせぬよう車掌の傍に立ち 生萱
急に会いたくなったで乗り越す 一鶴
乗り越しが首を振り振り降りて行き どんたく
乗り越しの前の駅まで知っていた どんたく
乗り越しの駅で買ったが当りくじ 野迷路
乗り越して気付かず口の軽い事 句念坊
乗り越しが今夜のプラン狂わせる 季賛
乗り越してまで言い寄ってくる男 玲人
乗り越してしみじみ小ぜにの有難味 生々庵
乗り越しをまだ気づかない二人 満潮
乗り越しの時間アリバイ食い違い 小松園
顔見知り同士乗り越し苦笑する 柳宏子
乗り越して目にしみわたる彼岸花 いわを
常連が乗り越しまっせとゆりおこし 尚史
乗り越してからのプランが派手になり 小松園
神妙な顔で乗り越し戻って来 柳宏子
乗り越しプランを変えるピクニック 玲人
楽しみに見てた酔いどれ乗り越さず 一舟
乗り越しをして太陽の高さ知る 水客
乗り越しも一こう苦にせず老夫婦 みさ子
乗り越してきょとんとしている二日酔い 文蝶
乗り越しをさせた夕刊そっと捨て 旅風
乗り越しのゼニを握っている暑さ 古方

兼題「片棒」 後藤梅志選

片棒をかつぎ一生棒に振り 季賛
片棒は妹聟がかつぐ桾 句楽坊
ドスが利く声が片棒引き受ける 和三郎
酒席での口ばど片棒間に合わず 八九寸
化粧せぬ妻に片棒がつつがなし 宗義
コンパクト片棒かつぐ顔になり 水客
片棒をかつぐ気合槍打っており 一ン十
片棒は一番先に逮捕され 城東
観光へ片棒かつぐ句碑が建ち 柳志
片棒を大物らしくちらつかせ 一舟
片棒は父がかついでいた汚職 良
前金を貰い片棒引き受ける 満潮
片棒を割り込んで取る儲け口 文秋
片棒になり切っている声をかけ 古方
片棒をかつぐ相談ガード下 満潮
貧乏も平気片棒かつぐ妻 舟遊
気の弱い男片棒かつがされ 白柳
事業好転片棒うるさがられ 好郎
片棒をかつぎ刑務所まで一緒 満潮
片棒のがっしり強い妻となり 尚史
片棒が頓馬でさくら間に合わず 生々庵
片棒をかつげば資金を貸せと言う 一三夫
責任を負うて片棒かついだ気 水客
片棒をかつぐ気ないかとぼろい口 あいき
運否天賦片棒担ぐ肚括る 默平
片棒を歯をくいしばり子がかつぐ 舟遊
四分六で片棒かつぐ欲を出し 旅風
打ち明けてから片棒と馬が合い 生々庵
伴睦さんの片棒ではたよりなし 梅志

兼題「腰」 山川阿茶選

奥さんともども腰低い選挙前 八九寸
いいヒップ孔雀になって長屋出る 光道
ツイストで腰五度振って息が切れ 野迷路
腰みののどじょうすくいが真迫り 句念坊
観音の腰の写実に魅せられる 生萱
分限者の店子に低い腰は過去 繁太郎
腰の線元は玄人というそぶり 多久志
腰痛を言うてマダムの年が知れ あいき
ツイストへ五十の腰がポキト鳴り どんたく
腰低うもみ手をされて儲けられ 一三夫

腰低い方ねと母が早や乗り気　狂二
ミリ単位女ごころで腰を締め　旅風
赤い灯がつけば腰痛忘れて出　一舟
末っ子は腰十円で踏んでくれ　与呂志
腰をもみ合うて金婚日向ぼこ　一三夫
年寄りの腰をたたいて言いっこ　水客
生涯を女形にかけた腰の線　良
腰一つひねれば剣豪二人斬り　宏子
腰きんちゃくと言われ社長の意見もし　舟遊
必勝のファイトに燃えた腰が割れ　尚史
あの腰でようまあ産めた優良児　旅風
自画像を書かせば細い腰に書き　一舟
どんな客か首相ペコペコ腰を出げ　雄声
腰押して貰うて貸切バスが出る　水客
もう母は女と見ている腰の線　一三夫
丸腰となれば上司へへつらわず　いわを
岸壁はフラで送ったアロハオエ　尚史
腰据えてまけたら買ってもいい金魚　旅風
山姥を舞えば山姥の腰の線　生々庵
中腰になってお金の入る話　小松園
洒落一つ話の腰をおる社長　栞
腰の線はめて蛇の目に秋の雨　与呂志
親ゴルフ子はツイストと腰を練り　専翁
腰紐の赤を気にして未亡人　柳志
物腰も日本一の美智子さま　奈良子
寒くとも薄着でくずさぬ腰の線　庸佑
うまず女の腰に洋装よく似合い　瑞歩
本腰になれと叱って金出さず　小松園
八百長とみせない腰のひねりよう　古方
折れそうな腰であっぱれモデル業　奈良子
腰ふってチャールストンの娘を叱り　与呂志
舞扇もてば米寿の腰が伸び　柳志
母の腰曲げた責任忘れてず　一舟
ボスだから神経痛の腰も折り　良
腰振って歌うカタカナ祖母あきれ　奈良子
おごられる話になれば軽い腰　文蝶
浪花節好きな社長で腰低し　静馬
可愛いベビー孫が上手に腰を振り　小松園
車えび腰のまるみを皿へ盛り　進之助
暖簾への気位い高く低い腰　専翁
審査員序でに腰も振らせて見　柳志
白銀へ腰で舵取るまがり角　井平
あんよが上手嬉しいへっぴり腰の孫　生々庵
野天風呂腰までの陽が透き通り　水客
大原女は桶子の売れた腰になり　黙平
腰衣粋も不粋も遠おにすて　阿茶
ハイヒール一直線に腰でゆく　阿茶

席題「椅子」　土井文蝶選

転地して藤椅子の軽い咳　進之助
飛車落へ助言の椅子が邪魔になり　柳志
空席の椅子が社内の気をもたせ　一三夫
回転椅子課長の顔のみえぬとこ　いわを
椅子蹴って立ったが腹心ついてこず　雄声
椅子寄せて今日も練ってる派閥策　圭井堂
椅子一つ動かすに苦労する人事　いわを
プロレスの血を呼ぶ椅子もショクのうち　一三夫
停退者今日限りの課長席　八郎
るす中に重役の椅子にすわってみ　みさ子
込み入った話はイスで切り出せず　文秋
嘱託の椅子の堅さに耐える齢　好郎
飲めそうな話へ椅子を寄せてくる　玲人
回る椅子女社長も板につき　与呂志
回転椅子社長は社長の声を出し　庸佑
女子学生の隣りの椅子へいく強気　狂二
欠員の椅子をめぐって小せりあい　進之助
午後の陽を受けてソファー脚を組み　白柳
社長秘書気の張る椅子を嫉妬され　阿茶
PTA小さな椅子にかしこまり　静馬
椅子のかたきたのし答案出来上がり　生々庵
安楽椅子残して山荘冬に入り　舟遊
太陽が回転イスの向きを変え　梅柿

席題「ベストセラー」西尾栞選

ベストセラーまずあとがきな読んでみる　奈良子
重版になってベストセラー買う　古方
映画化へベストセラーはもめつけ　玲人
往年のベストセラーをむしかえし　柳宏子
老眼鏡掛けてベストセラーを読みこなし　みさ子
情熱に吸い込まれてるベストセラー　狂二
ベストセラー又も恋人行き違い　雄声
土地がらでベストセラーの順変わり　与呂志
ベストセラーサブタイトルにひっかかり　阿茶
ラブレターベストセラーのことにふれ　梅志
ベストセラーちょとお色気を盛り過ぎる　生々庵
さて読んでベストセラーの頼りなさ　専翁
ベストセラー今度は普及版で出る　古方
ベストセラーの題だけは覚えてる　白柳
ベストセラーもう並べてる古本屋　柳志
明治以来の版を重ねて世にこびず　水客
ベストセラー女気負って羽田立ち　行人
ベストセラー積木を崩すように売れ　水客
ベストセラー一つで社運もち直し　文秋
秋深しベストセラーで読み足らず　玲人
妻も娘もベストセラーにとりつかれ　白柳
ベストセラー出版屋だけ騒ぎ　満潮
たかが易こんな本までベストセラー　一三夫
ベストセラーあんまり高い本はなし　阿茶

席題「紫」　橘高薫風子選

此の糸は紫だよと教えられ　みさ子
糸抜いた紫色の傷を見せ　白柳
紫が好きで早う死なはった　狂二
年よりは紫の色若く見え　行人
むらさきの色を愛している落目　梅志
思い出とともに紫身につける　奈良子
此の帯が似合うているお通夜　与呂志
紫の恋は中年の女かも　舟遊
紫にかすむと友の奈良だより　阿茶
むらさきが好きとあやめの線に似て　文秋
紫を着る秋を着る恋を着る　夢紅
紅の橋紫だけが眼にのこり　東天紅
黄菊白菊紫の菊はすねて見え　生々庵
流行の外で紫似合うなり　旅風
紫にたとえて恋の貧しかり　梅柿
紫に個性を出して夜に生き　文蝶
常盤津と紫こんなにうまがあい　進之助
自画像のバックむらさき塗りつぶし　水客
紫に包む然えない女なり　梅柿
むらさきのふくさに弱い衆議員　圭井堂
紫が赤に変わった恋のこと　梅柿
恋人の紫も良し赤も良し　柳志
アクセントにして紫の弱くなく　古方
父母が頻りに恋し茄子の色　雄声
愛別離苦テープの色も濃紫　薫風子

雑川　玉造支部句会　（大阪市）

西出一栄報

営業中という顔付きはママでなし　柳宏子

37年度全出席者（十月現在）
圭井堂・一三夫・文秋・清風・すゝむ・柳宏子・薫風子・庸佑・静馬・生々庵・舟遊・阿茶・雄声・いわを・季賛・宏子・葭乃

天位受賞者

⑦水客⑥生々庵⑤文秋③圭井堂・一瓢・晃②三司・圭水・好郎・静馬・一三夫・恒明・進之助・多久志・白柳・柳志・阿茶・雄声・①客遊子・庸佑・栞・和郎・梅里・正一・舟遊・いさむ・みさ子・どんたく・奈良子・旅風・黙平・梅柿

不朽洞賞杯受賞者

②圭井堂①圭水・一瓢・静馬・文秋・多久志・恒明・みさ子・雄声

京銘菓静かに内らで営業中　水京
病院の小便小僧営業中　みね子
営業中木札もはずむティルーム　豊子
若人は残暑をフルに使ってる　恵子
気のゆるみ残暑の方が身にこたえ　喜久堂
残暑克服等と男へ酒が要る　六竜子
余命悟る身が古い蔵書を整理する　勝一
ベストセラー中身は古本の同じ　らつきよ
古本のページ開けば蚊のしおり　城東
天皇がまだ神でいる本も立て　正一
想い出は古本整理捗らず　清子
古本屋蔵書にしたい棚も持ち　文秋
今使こて探す眼鏡の置き処　井平
物忘れ台所に黒板吊るす母　宇佐夫
アラアラとウッカリ夫人又戻り　かつみ
値切るだけ値切って財布忘れてる　あいき
それらしいことは聞いたとメモを繰り　珠笑
何探していたのだったかさえ忘れ　一栄
忘れ物したふりをして逢いに行き　風仙洞
「やあ」「ようこそ」と逢えた旧友名を忘れ　清

川雑　**阿倍野支部句会**　（大阪市）
金井文秋報

一ぱいの酒も薬の顔でのみ　双楽
下戸だけが事の真相知っており　和郎
ハンサムな下戸へ妓はすけてやり　生薑
造形の神の不出来が瓜二つ　一三夫
違う柄着せてもやはり瓜二つ　小松園
ゆらぐ灯へ気抜けた顔の無一文　梅里
マダム今日余程疲れた足の裏　ふみ子
気抜けしたような顔して子沢山　清風
気抜けした頃に二人は式を挙げ　清人
借金を全部返して気抜けがし　晃
ほんとうの気抜けになった一七日　好郎
荒れ模様黙って座敷そっと立ち　喜仙
調停委しばし荒れるに任しとき　素郎
悪友が従いて来たのでなお荒れる　圭井堂
荒れる手を手相へ見せて涙ぐみ　白柳
嘘付きのシンボル胸に議員章　八郎
ニキビ面若さのシンボルとも言うとれず　あいき
喜んで泣かす魅力を持つ国旗　正一
シンボルの入れ墨巾を利かす街　専翁
三千の鳩五輪旗の空に翔け　文秋
昼休み私用の電話はばからず　奈良子
丁寧に社長に私用頼まれる　柳宏子
大臣の墓参に知事が出迎える　狂二
おしのびにボディガードが邪魔になり　静馬

川雑　**京都支部句会**　（京都市）
田中烏雀報

母となり初めて母へ知る感謝　美佐緒
初めから嫌でしたと女言う　一窓
初めての株で儲けた不倖　和三郎
がっちりと折半にしてデート　親生
妻と母分けあっているひや御飯　ふたよ
半分のサンマは冷えて妻無言　紫蘭
電化した中に火だねが欲しい母　紅寿
今日も街バンコーの音と鍔接の火と　生薑
尻に火をつけてステテコうらぶれる　司郎
そうおだてられては一升覚悟する　紅鳥
問題をかかえて英語へった基地　王石
事務所皆英語でないとだけわかり　烏雀

川雑　**大聖寺支部句会**　（加賀市）
野村味平報

飴ねだる子に振りつけが出来上り　酔羊
月青く砂丘の下を踊り抜き　味平
酒の座の踊り素面で見る馬鹿さ　久雄
豊作の村から青年去って行き　喜蕉
豊作の畦を歩いて帰省する　雅城
台所の電化もうれし稲の出来　光郎

川雑　**備前支部句会**　（岡山県）
横山一声報

訓示調退職してもまだ残り　草二
月給をもろてる身なり訓示きく　東岸
廊下でも社長の訓示よくきこえ　千呆
先輩と飲めば話が訓示めき　秋月
テープコーダー上座に据えて訓示され　照路
勿体をつけて訓示をテープにし　博友
ボーナスを渡すに訓示長すぎる　宗義
裸一貫からを社長訓示にし　真奇
二日酔い訓示の意味を考える　美舟
訓示する社長ゆっくりあるいて来　芳月
貰録を見せる訓示がまた詰り　胡風
校長の訓示忘れた留置場　伊久野
始業式の訓示へ黒い顔並び　あやめ
訓示するその原案は秘書作り　一声
一言の訓示で済ませた社長振り　竜泉
愛人に思いの外のひもが居り　秀代
愛人はとなりの村で牛を飼い　正洲
人混みの中で愛人良く目立ち　久米雄
極楽の話で老人悦に入り　三六

川雑　**宇部支部句会**　（宇部市）
津秋六花報

傷ついて帰る故郷へ母が待ち　千里
解説がエースのマナーまでもほめ　南風
就職にまた古傷をつつかれる　山峰
古傷を知ろうともせず釜が崎　生薑
すねに傷どれも刑事の顔に見え　豊年
すねに傷あって冗談とは取らず　弘道
古傷を婦人誌黙って嫁けという　実男
エースこの頃サイン文字をけいこする　六花
ニュース気取りが初心忘れて行き詰り　東村
血の泌じを過去がエースの座につかせ　万年青

川雑　**岡山支部句会**　（岡山市）
浜田久米雄報

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の紹介誌

11月号発売中　150円（〒18円）

特集

1. 調味料特集
2. 食品包装特集

講座
食品官能検査
食品工場の衛生
食品品質管理

◇海外ニュース　◇特許ニュース
◇意匠ニュース　◇商標ニュース

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

大阪市北区
原町5
電(361)9373～4

食品と科学社　振替　大阪6702番

うれしさが顔色に出るはれ姿　千呆
顔色に出ぬ酒でいて酔うている　春生
顔色がよいとお世辞で元気づけ　飴ん坊
青白い顔して真赤な嘘を言う　宗義
愛犬の方が顔色早くよみ　千駒
社長室から青ざめて戻って来　幽谷
顔色もかえぬマダムにあしらわれ　東岸
顔色を変え善人の小さい嘘　秋月
赤字追う社長へ去年の税が来る　佐加恵
人様の赤字で繁昌した質屋　鮫虎狼
線路にも草が生えてる赤字線　胡風
赤字でもへそくりだけは残して居　照路
赤字だよと笑って暮らせるいい身分　博友
わびしさは子に顔色を見てとられ　久米雄

川雑　**米子支部句会**　（米子市）
小西雄々報

垣一重隣りの職業まだ知らず　無閑
文化とは五反百姓へ耕転機　蛙眠子
落選が組織の力信じすぎ　詩郎
親切をされて気をもむ未亡人　雄々
探し物ついでに出しとく秋の風　素瓢
遮断機が上り話がそれっきり　一机
出張のたびに公費で膝枕　布堂
好感のもてる男で金がなく　秀峰
両肌を脱いでネオンの化粧出来　まさよ
ブラトニッククラブ臆病な恋と知り　綾美
観賞の眼に媚び金魚鉢に生き　明甫
人妻を演ずる女優婚約し　福女
あきらめていたが形見がまた泣かせ　一保
夜遊びの帰りに朝草刈りとあい　一笑

川雑　**出雲支部句会**　（出雲市）
尼緑之助報

祭から寝た子と金魚帰って来　芳正
ゴシップでトップスターにのしあがり　晃男
メーデのトップに父が居る若さ　李朋
なべ底の会社へ組合遠慮がち　柳狂
お祭りへ大阪弁も戻って来　やすを
脱線をしたまま組合まとまらず　岬月
白い目を第二組合背に感じ　壮
廻り椅子組合員でない姿　章峯
トップモード青空に吸われそう　緑之助

川雑　**篠山支部句会**　（兵庫県）
酒井ひか平報

不快指数どう耐えて行く娘の行儀　一風
お行儀は足を投げ出す娘に頼り　初音
阿波踊り行儀の悪いのがよろし　青峰
碧い目も千家の裏へかしこまり　みのる
もう酔が回わって行儀崩れて来　村雨
行儀よい娘のか細そさがいじらしい　梅枝
すだれ越し見ゆる裸の夏祭　枝葉
足音に直す行儀が間に合わず　たみ子
子の前で父の行儀を目で叱り　越山
お行儀は知らない娘だがよく儲け　可住
先ず汗を入れてあいさつあらたまり　ひか平

川雑　**大鉄支部みなと句会**（神戸市）
植村客遊子報

お見舞の花束朝の露を持ち　白渓子
誕生日手製の寿司で祝われる　初甫
ハンドルに命託して歌となる　賀人
露知らず妻の怒りにふれている　礎石
無医村へ無料奉仕の汗をふき　万的
この家に寿司一人前は上の客　朝気
ハンドルをにぎって無口な父となり　美由起
無料茶屋出るとき結構高くつき　ヒロシ
国訛りが抜けず皆んなに親しまれ　水客
兄の代になって故郷遠くなり　客遊子

大阪逓信病院川柳会　（大阪市）
橋本幸男報

初対面剛れて名刺出して見る　敏行
ネオン裏旅のつかれをかきたてる　宏子
誘惑の美女はネオンにさえて居り　竹青
ネオン消え心斉橋の汚なすぎ　幸男
通過駅たった一つのネオンの灯　春雄
屋上で一人泣いてる女事務　愛論
診察は素顔で来いと叱られる　草右
一寸待ってて変な素顔を塗りつぶし　路郎

杏林川柳会　（大阪市）
中島生々庵報

切れ目だと口には出さず目で送る　珊枝郎
幕切れに涙のままで手を拍く　野迷路
どさくさに理屈ぎらいがそっと逃げ　瑞川
どさくさも試練と思い生き抜こう　一哲
どさくさにまぎれうっかり承諾し　一伸
入院のどさくさおぎァを待つばかり　阿茶
どさくさに帯へはさんだのを忘れ　小石
どさくさに神様俺を見失い　生々庵
どさくさで今日は牛乳飲み忘れ　路郎

南海電鉄川柳会　（大阪市）
辻圭水報

自信ありきされど予想外とてれて見せ　八郎
下積の男に何もかも聞いて　句念坊
下積みへねぎらう言葉ゆきとどき　宏子
月賦まだすまぬ新車で事故起し　静幸
新車にも会社の特徴表わして　みなっき
荷物どっさり積まれて新車不服なり　圭水
制限のスピード新車は越えたがり　貴山
いたわるように新車ふいている　雄声
副社長の方が新車でご出勤　路郎

帝化川柳会　（大阪市）
谷沢好祐報

渦巻が二つあったのに弱気な子　一男
公約は市長一人で空廻り　一徹
倒産は覚悟約手を空廻し　九柴
渦中から這い出て秋へ深呼吸　一平
洗濯機幸福な渦今日も巻き　雄水
宵戎賽銭人の渦に落ち　白水

富柳会句会　（富田林市）
阿部柳太報

一代でいいとやくざは子を案じ　辰始
政界にまで親分あり子分あり　好祐
関白は年増の口に躍らされ　秀雄
禿ちゃんの方は年増に任しとき　雅堂
呑めるだけ呑んで年増にある涙　京一楼
色と欲年増になってきつうなり　繁三
金出来てからの野心が恐ろしい　きはち
野心あるらしいに渋い出しぶり　摩天郎
野心みな捨てて帰農の荷をとめ　六竜子
野心もう昔の夢と恋に生き　紅月
鏡台へ今日デートの紅の冴え　呂人
バックミラー夜の二人の行状記　はじめ
借金取り二階の音に居座る気　とも子
二階借時代を社長懐しむ　雄声
三顧の礼実ってわが社の強味増す　八郎
本妻の強味やっぱり元の座へ　周一
祖父の強味恩給が有る恩給が有る　美代
子の加勢母あきらめた寝りよう　貴山

宴会・出張パーティ・折詰弁当
梅里ノ店
大萬
料亭　阿倍野区松崎町三ノ一〇
TEL(七二)三九三五番
鮨の店　アベノ橋近映地下食通街
TEL(七二)〇一四七番
串の店　千日前大劇裏
TEL(六三)二七一〇番

柳樽室

路郎生

★黄菊白菊をジッと眺めていると、清澄な秋が私のためにあるようだ。

★既報のように、東北川柳大会に招かれて私は仙台へ出かけた。十月六日の前夜祭、七日の大会、大変な盛会ぶりだった。

★近頃の全国句会の状況を見ると、大都市の大会よりも、地方の中都市の大会の方が参加者の数が比較的多いようである。大都市が比較的寄りが悪るいのは、①趣味や娯楽の各種の会合が多うすぎる②派閥による分裂③マスコミにわざわいされる④川柳年令が高いので、親戚関係や町内関係に引っぱり出される⑤交通マヒが原因する⑥其の他いろいろの支障があるようだ。

★仙台で二泊したが、福島市の白石維想楼氏と枕をならべて、十二時過ぎまで、談し込んだ。氏は井上剣花坊主宰の「大正川柳」の編集を吉川雉子郎氏からうけついで永らく編集に苦労をした人、私とは何十年振りのベッド会談だ。日車や半文銭などの話を聞かして呉れと、今でもメモをとるほどの情熱の持主である。私にとっては仙台での最大の収穫だった。

★宮城野社の後藤閑人氏は健康を害していられたが、主宰者ともなれば少々の悪条件は乗り越えてゆかねば大会の士気に関するので陣頭に立って活躍されていた。これに南谷子、滝子、一宇氏等の幹部同人が大会運営の主軸となっていられた。大会参会者の熱心な作句振りもうれしく拝見した。

★本誌へのご寄稿は、川柳的読物か、川柳に関する研究発表か、初心者の啓蒙的エッセイかであって欲しい。視野の狭いものや、他人をきずつけるのを目的としたものは採らないので、その点お含みが願いたい。

★お互いは先ず句が第一であることに気がつけば何も言うことはない筈だ。その人その人のよい持ち味の句を送り込んで下さることを切望してやまない。

柳人交歓年賀広告を募る

新年号へあなたの年賀広告を

★一口金二百円。幾口でも申し込んでください。

★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。

★一口分は五分の一段組三行。

★原稿締切は十二月九日着便

★広告料は前金のこと（郵券代用でもよろしい）

★この広告料は年賀広告の特別料金ですから他の広告には適用いたしません。

川柳雑誌社

▼ペンの散歩▼

▲先生がお一人で仙台から東京をまわってこられた。このお元気には若いボクがアゼンとした。

▲いつも旅先から絵ハガキを送ってくださるが、まずボクはペンの勢いを拝見してから読むことにしている。身心が疲かれていなさるかどうかがスグわかるからだ。まあなににしてもすごいファイトだ。

▼ファイトといえばファイティング原田のボーンをKOしたラッシュは見事だった。白井義男から七年十一か月の空白と五度の敗退ののちのこの快挙である。十代の世界チャンピオンが日本から誕生したのだ。十代の株が上ったことは力強いことである。柳界にも第二の小島六厘坊という十代柳人がそろそろ出現してもいいのではないか。

▼新年祝賀広告の時季がきました。あなたのご健在を誌上でお知らせください。（一三夫）

新◇刊◇紹◇介

▼史陽選集Ⅰ「心中天網島」、Ⅱ「八代目団十郎の死」が、十月一日に大阪市天王寺区元町四天王寺史陽選集刊行会から上梓された。本書は大阪郷土研究の権威牧村史陽氏の、この道五十年を記念して出版されたものであり、引き続き五十冊を刊行された由。B6版六四頁。五〇〇部限定版。定価各二〇〇円

十一月句会——川雑支部

★南海電鉄句会・15日（木）六時、題、欠航・見栄・秘密・所、難波高架下親和クラブ

★京都句会・16日（金）夕、題、未来・撫肩・菓子、所、四条縄手仲源寺。

★明和研究句会・18日（日）一時、題、全集・運河・山茶花、所、阪神電車鳴尾東南二百米。★かがみ句会・2日（金）六時、題、横道・暢気・善処・作祈・あいまい、所、池田古心居。

★阿倍野句会・20日（火）七時、題、黒幕・弱り目・漫画・ハンサム、所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割烹大万。★玉造句会、10日（土）七時、題、たのしみ・棚・菊人形、所、市電玉造南一〇〇米大阪信用金庫

待望の「川柳句集」

川柳句集が出ました！好評です！

橘高薫風子著　麻生路郎序

定価二百五十円　送料六〇円

▼著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入って揉まれ、川雑編集部員として精進を続けている前途ある好作家である。約七年間の習作「有情（うじょう）」を上梓して弘く世に問うことにした。

★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。（切手代用可）

大阪市住吉局区内万代西5丁目25

発行所　川柳雑誌社

電話大阪(671)6081振替口座大阪75050

大阪・名古屋・伊勢を結ぶ近鉄特急

ステキな特急2階電車

大阪—名古屋 ノンストップ 2時間18分

大阪上本町から＜名古屋ゆき…20往復 伊勢ゆき…9往復

名古屋から＜大阪ゆき…20往復 伊勢ゆき…10往復

伊勢から＜大阪ゆき…9往復 名古屋ゆき…10往復

オール座席指定・特急券はご乗車の14日前から近畿日本ツーリスト・日本交通公社会員の営所で発売（近鉄上本町名古屋・宇治山田と特急停車駅は5日前から発売）

近畿日本鉄道

第一製薬
東京・日本橋

精がつく薬
パント錠

副腎・肝臓強化

副腎に効くパント錠は
精がつきます。疲れがとれます。

疲労・中年過ぎの精力、体力の衰え
二日酔・肌あれ・アレルギー性疾患

20錠・50錠・100錠

麻生路郎著　好評噴々

川柳鑑賞

川柳の味わい方・五百数十句

（毎日新聞評）
麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう五十五年にもなる。
この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の柳誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁重な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

価二五〇円
送費八〇円
B6版
二五〇余頁

発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地
電話大阪（671）六〇八一
振替口座　大阪　七五〇五〇

麻生路郎先生著

川柳とは何か

価二五〇円
送費一〇〇円

—川柳の作り方と味わい方—

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、所界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所　川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27　振替東京29507

募集

課題吟募集

主役（千句以内）丸尾潮花選
ペレー帽（千句以内）河村日満選
里心（千句以内）小西雄々選
（十一月十五日締切）

モーニング（千句以内）中島生々庵選
神前（千句以内）小西無鬼選
のんびり（千句以内）藤井明朗選
（十二月十五日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句以内）麻生路郎選
川柳塔（雑詠十句以内）北川春巣選
文章（評論・研究・感想其他）麻生路郎選
（毎月十五日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▼「課題吟」は誰でも投句が出来る。「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

B列5号　毎月一回一日発行
川柳雑誌　第十一号　三十七年
定価　九〇円（送料六円）

（振替）
半ヵ年　五七六円（〒共）
一ヵ年一、〇八〇円（〒社負）

昭和三十七年十月廿五日印刷
昭和三十七年十一月一日発行

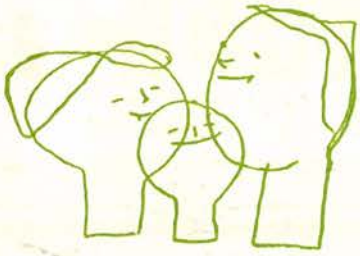
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地
編集兼発行人　麻生幸二郎

大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地
発行所　川柳雑誌社
電話大阪（671）六〇八一
振替口座大阪　七五〇五〇

Printed in Japan

昭和廿二年七月一日　第三種郵便物認可
昭和卅七年十一月一日　発行（毎月一回一日発行）
編集兼発行印刷人　麻生幸二郎
発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地
電話大阪（671）六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇番
定価九十円（送料六円）

一家そろつてホーライ党



廣東料理

蓮菜

大阪なんば・TEL（641）551－2

中年からの
精力を盛りたてる
ローゼリー
☆天然・新鮮ローヤルゼリー☆

内服液・一本　一五〇円（五本入もあり）
注射液・五管入　三〇管入

中外製薬

疲れをとり
抵抗力の強い
からだをつくる
高単位綜合ビタミン・ミネラル剤
ポポン-S
20日分 350円・60日分 950円・120日分 1600円

シオノギ
塩野義製薬株式会社

高知／琴平への
最短コース！
（小松島へ525円4時間　琴平へ955円6時間40分
高知へ1095円7時間30分）
なんば発南海ライン

●ゆき

	なんば発	和歌山港発	小松島港着	琴平着	高知着
(1)	7.45	9.00	11.40		15.09
(2)	10.30	11.50	14.30	17.30	18.05
(3)	14.10	15.30	18.10		
(4)	17.40	19.00	21.40		

●かえり

	高知発	琴平発	小松島港発	和歌山港着	なんば着
(1)			8.00	10.40	11.57
(2)	7.30		12.10	14.50	16.05
(3)	11.25	12.21	15.00	17.40	18.55
(4)			18.40	21.20	22.35

（641）8688　0103　9734
（341）5038　（251）6117
堺（2）0678　徳島（2）2243

南海電車